
漆黒、恐怖、電子、特別編

ゼクス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

漆黒、恐怖、電子、特別編

【Nコード】

N2904Y

【作者名】

ゼクス

【あらすじ】

此処は《漆黒の竜人》、《始まりに舞い降りし恐怖の根源》、《電子の獣と少女達》の作品の特別編の場です。三つ作品の特別編は全て此方に載せます。（近々、此方に《漆黒の竜人》の特別編は移転します）

第一話 召喚（前書き）

作者のゼクスです。

今回投稿する特別編以降、特別編は全て此方に載せます。また、漆黒の竜人に載っている特別編も近々全て此方に移転します。

それと今回投稿する作品は、携帯から投稿です。

第一話 召喚

何処とも知れる空間。

その空間の中を漂う意識が存在していた。それはゆっくりとゆっくりとまどろむように意識の覚醒の兆候を繰り返すが、それは完全に覚醒することなく、ただ静かに眠りと目覚めの狭間を行き来し続けていた。

それは覚醒寸前に至る瞬間の間で、何時自身の意識は完全に覚醒するのかと疑問を持ち続けていた。

今回も再び眠りの淵に落ちてしまつのかと考えていると、どこからともなく調子に乗つたような、まるで遊んでいるかのような声が届いて来る。

――閉じよ閉じよ閉じよ閉じよ。繰り返すつどに、四度……あれ、五度? ……え〜と、満たされるトキをー、破局する。

(……クスクス……オモシロイ……シラナイコトガ……アツタンデスネ……オモシロイッ!)

ソレは流れ込んで来た声と知識によって目覚めてしまった。

本来は目覚めないはずの存在が、刺激を受けたことによって覚醒してしまった。

そしてソレはゆっくりと聞こえて来た声の方向に意識を動かし、それは現世へと現界してしまう。

現世に存在するとある一軒家。

その家に住んでいた住人は、突如として襲つて来た快樂殺人者 -

雨生龍之介うせいりゅうのすけ - によつて未つ子一人を残して殺害された。更に龍之介は自身の実家に存在していた書記を使つて、儀式的な殺人を敢行したのだ。

ソレは本来ならばただの異常な殺人劇で終わるはずだった。だが、今龍之介が居る地ではとある魔術儀式が行われた。更に龍之介には先祖から伝わっていたその儀式に関わる為に必要なモノが備わっていた。

故に偶然にも全てが揃つた状況でイレギュラーが重なり、龍之介はその魔術儀式に参加する為に必要な存在 - サークヴァントの召喚に成功してしまつた。

「問いますよ」

龍之介が家に住んでいた男女とその二人の長女の血で遊びで書いた魔法陣から立ち込めていた霧の中から女性の声が響き、龍之介は霧の中から現れた人物の姿に目を見開いた。

人が本来ならば持てる筈が無い透き通つた蒼い髪をポニーテールに纏め、まるでルビーをそのまま埋め込んだように輝く紅い瞳。凡そ自然で出来たとは思えないほど整つた容姿と顔。その身に纏つている服は汚れ一つ感じさせない綺麗な白衣。

幻想的と呼べるその姿に龍之介が言葉を失っていると、魔法陣から現れた女性は龍之介に問いかける。

「私をキャスターの座へと呼び、現界させた召喚者・・・いかなる理由で呼んだのでしょうか？」

「・・・えと、雨生龍之介です。職業はフリーター。趣味は人殺し全般。子供とか若い女が好きです。最近は基本に戻つて剃刀に凝っています」

「人殺し？」

龍之介が告げた事実深く関わっている人物でなければ気がつかない程度に女性は眉を顰め、部屋の中を見回す。

部屋の中には惨殺されたこの家の主達とその子供と思わしき長女の亡骸が存在し、更に部屋はその人物達の血で壁が塗りとくられていた。更に自身が現れた魔法陣に目を向けてみると、召喚された影響で焼き焦げていたが殺された人物達の血で描かれていた事実が気がつく。

女性は心の底から不快そうに眉を顰めるが、呼び出した当人である龍之介は女性の変化に全く気がつかず、部屋に隅の方を軽瓢けいひょうに手で示す。

「まあ・・・小難しい話はおいておいてさ・・・アレ、食べない？」

「フウーーーーッ!!」

龍之介に手で閉められた子供・この家の末っ子で今は猿轡とロブで拘束されている・は、恐怖からか必死に身を捻り始める。

女性はその子供を確認すると、ゆっくりと白衣の中に手を入れる。龍之介はその様子に何かが起きると漠然と思いつながら女性の一挙一動を見逃さないように注視した瞬間、龍之介の首に前触れも無く注射器が突き刺さる。

「ーーーーッ!」

「・・・・えっ?」

突如として自身の首に刺さった注射器に龍之介は呆然と声を出すが、次の瞬間、その身を信じられないほどの激痛が駆け巡り、同時

その事実にも男の子は恐怖から大粒の涙を零しながら、床を這って逃げようとするが、女性はゆっくりと男の子に手を伸ばし、その身を縛っていたロープを無言で切り裂く。

「ブザン！」

「パサッ！」

「ヒッ！」

「怖がらせてしまいましたね。残念ですけど、ご両親とお姉さんは助けられません。ごめんなさい……せめて今はゆっくりとお休みなさい」

「アッ……」

女性が男の子の額に触れた瞬間、男の子の意識は遠退き深い眠りに落ちた。

それを確認した女性は、ゆっくりと男の子を抱き上げ、フツと部屋の一箇所に置かれていた不可思議な生物を模した銅像に目が行く。

「ああ、これが触媒だったんですか。いや、まさか、異世界移動の実験に使用した銅像がこんな一般家庭に流れ着いて、召喚の触媒に使用されるとは……天文学的な確率ですね」

そう女性は呟きながら、左手で棚に置かれていた銅像を眺める。

その銅像は女性が生前実験の為に作り上げた銅像であり、実験の為に使用して行方が全く分からなくなった物品だった。因みに別段何か特殊な素材を使っている訳でも、特殊な機能も存在していないただの銅像である。

多少形はとある生物を模しているが、ただの銅像でしかないために放置していたのだが、まさか死後で呼ばれる触媒になるとは女性には夢にも思ってた。なかつた。

「さあて、聖杯戦争ですから・・・中々に面白そうですね。ゆっくりと研究させて貰いましょうかね・・・クスクス」

女性 - 異世界において最も敵に回してはならない人物の二人目として認識されていた人物 - フリート・アルハザードはこれから起きる激動の戦いに、久しく忘れていた好奇心を疼かせながら部屋を出て行く。

後日、この家の末っ子だった子供は警察署の前で発見され、警察に保護されて孤児院に最終的に送られたが、少年は成人するまで支援金が送られ、後に警察組織の改革に乗り出す政治家になるのだった。

第二話 参戦（前書き）

様々なご意見ありがとうございました。

全ては無理かもしれませんが、出来るだけ使用を考えてみます。

第二話 参戦

深い闇に満ちた空間。

その空間の主であるフリートは、自身の目の前に存在している複数のモニター画面を興味深そうにそれぞれ眺めていた。

モニターに映っているのは、今回の聖杯戦争の参加者である魔術師とサーヴァント達。召喚されたのは最後だったが、それでもフリートは参加者の誰にも、この地の管理者や古くから住んでいる老獪にも気づかれずに冬木市の陣地化を終えたのである。

そして現在は、冬木市に集結した魔術師とサーヴァント達を自身で作ら上げたサーチャーを使用して監視していた。

「ふむ、アサシンのサーヴァントは未だに現存して、マスターは中立地帯で安全を得ていますか・・・それを指示したのは遠坂時臣と言う男・・・そして遠坂が召喚したサーヴァントも並のサーヴァントではないですね・・・ライダーに関してマスターは未熟そうですね、それを有り余るほどのサーヴァント・・・ランサーはマスターが油断と慢心を持っていますから、そこから衝けば切り崩せそうですね・・・セイバーは今のところは様子見ですね・・・ですが、問題はその隣に女性の方でしょう」

フリートはそう呟きながら、モニターの一つに映っているセイバーと共に街を歩いている銀髪に赤い瞳をした女性・アイリスフィール・フォン・アインツベルンに険しい眼差しを向ける。

一目見ただけでフリートには、アイリスフィールが普通の人間とは違っていることに気がついた。

自身の世界に存在していた人工的に作られた人間に近い印象を、フリートはアイリスフィールから感じているのだ。

「うゝむ・・・この世界の魔術師に関する情報が少ないのは不味いですね・・・暫らくは身を隠して情報を収集に徹した方がいいでしょうね・・・ムッ!！」

突如として自身が冬木市中に張り巡らしている監視網から魔力の奔流を感じたフリートは、眉を僅かに顰めながら魔力の奔流を放った主が映るモニターに目を向ける。

そのモニターに映っているのは、港場の倉庫街に立っているランサーの姿と倉庫街に身を隠しているランサーのマスターであるケイネス・アーチボルト。

先ほどの魔力の奔流は獲物を誘き寄せさせるための撒き餌だったのだとフリートは思いながら、丁度いいと内心で考える。

（これは他のサーヴァントの情報を手に入れられる良い機会ですね・・・おや？）

ランサーとケイネスが映っているとは別の他のモニターの映像を目撃したフリートは、映し出された様子に首を思わず傾げた。

先ほどのランサーが発した魔力の奔流によって、次々と他のマスターとサーヴァント達も動き始めていた。他のサーヴァントとマスターの情報を集めているアサシンも含め、フリートを除いた全てのサーヴァントが一箇所に集まろうとしている。

その状況を即座に把握したフリートは、口元を笑みに歪めてゆっくりと立ち上がる。

「これはますます嬉しい状況ですね。クスクス、他の参加者達の情報が一気に手に入るチャンスですよ。それにこの状況は、利用出来ますね」

そうフリートは呟くと共に、何処からともなく刀と小刀を取り出

し、白衣の中に仕舞う。

そのままモニターを消滅させて、ゆっくりとアジトの入り口に向かって歩きながら呟く。

「さあ〜て、“性格が違う私の顔見せに行きましょうかね”」

そうフリートは不穏な言葉を呟くと、サーヴァント達が集結しようとして港場へと向かうのだった。

冬木市のとある港場。

その場所が聖杯戦争の本当の意味での初戦の開催場だった。戦っているのは呪符らしき布を巻いた長槍と短槍を握った軽装な装いの端正な男ーランサーのサーヴァントーと、不可視の剣を振るっている蒼いドレスに白銀と紺碧に輝く甲冑を纏った翡翠の瞳の少女ーセイバーのサーヴァント。

二体のサーヴァントは互いに己が持つ武器を相手に向かって繰り出し、それぞれ戦っている相手の実力に戦慄を感じていた。

そしてセイバーとランサーの戦いを見ている者が複数いた。セイバーと共に街を探索していたアイリスフィールに、ランサーのマスターのケイネス。猟犬のように隠れているセイバーの本当のマスターである切嗣とそのパートナーである舞弥。その他にもセイバーとランサーの激闘を見つめている者達がいる。

そして戦いの場から一キロ近く離れた地点の海上で眼鏡を掛けたフリートが、戦場を眺めていた。

（流石は最速と最優と呼ばれている二体ですね。技術に実力、共に超一流ですよ・・・まあ、本気で戦えば、私の敵じゃないんですけどね）

セイバーとランサー。共に超一流の実力を持った英霊達なのだが、本気のフリートと戦えばセイバーとランサーでは勝てる可能性はゼロに近い。

何せ、フリートの本気とは生前に作り上げた自らの宝具を一斉に使用するという意味だ。そうなれば、それはもう戦いとは言えない。ただの一方的な蹂躪でしかない。

最もフリートにはそれを実行する気はない。己の目的を完遂する為には、今しばらく他の英霊達にも消えて貰う訳にはいかない。何よりも他の英霊達はフリートにとっては、大事な研究対象でもあるのだ。

(フッフツ、やっぱり研究は楽しいですね。生前では結局不可能だった死者蘇生を限定ながらも成功させている聖杯……必ずその原理を手に入れて見せます!!……おや?)

自身が見つめている先の視界で、フリートは一瞬だけ身を隠しながら移動する影を捉えた。

即座にフリートは掛けていた眼鏡を操作して、戦いの場に放っていたサーチャーが捉えている映像を右側のレンズに映し出す。

(……やはり、現れましたね、アサシン……そしてもう二人……セイバーと共にいる女性の協力者でしょうね……ムッ!……マスターでしたか)

コンテナの山の隙間に隠れながら、ワルサー狙撃銃を構えている切嗣の右手の甲に刻まれている令呪を目撃したフリートは、切嗣こそがセイバーの本当のマスターだと確信した。

他のサーヴァントで、未だ発見していないのはバーサーカーとそのマスターだけ。他は全てサーチャーを使用して発見している。状

況から考えて切嗣がバーサーカーのマスターとは考え難い。

(やけに目立つ動きだと思っていましたが、やはり囿でしたか・・・
・少し警戒を強めた方がいいですね。あの男には)

そうフリートは内心で呟くと共に、右手に転送用の魔法陣を発生させ、小さな黄色いバツタを思わせるメカを呼び出す。

ーーブーン!

「行きなさい」

ーーシューン!

フリートの声と共にバツタはフリートの手から飛び出し、空中で迷彩を行い、宵闇の中に消えていた。

それを確認すると、フリートはセイバーとランサーの方に視線を戻す。

丁度その時にランサーは左手に握っていた短槍を足元に放り捨て、右手に握っていた長槍の呪符を剥がしていた。

ランサーが遂に宝具を使用する気なのだとしてフリートは悟り、目を凝らしていると、蜃気楼のように凄まじい魔力を立ち上らしている深紅の槍を目撃する。

(フーム。見たところ、大規模な威力を發揮するタイプではなく、デバイダーと同じ武器その物のが、宝具としての性質を帯びているタイプでしょうね。となると、もう一本の槍にも何かしらの能力が宿っていると考えるべき・・・アレ?もしかして、介入は無理なんじゃ?)

今更ながらに自身が入り込む余地がない可能性にフリートは気がついた。

どう考えてもあのセイバーとランサーの戦いに割ってか入れば、空気が読めない馬鹿としか見られないだろう。しかもその後には、確実にセイバーとランサーの怒りが待っている。

生前に共に過ごした戦いの邪魔をしたら、凄まじく激怒する竜人の存在を思いだしながらフリートは、再び戦いを再開したセイバーとランサーに目を向ける。

(・・・ちよつと、此処で他のサーヴァントが消えるは困りますね・・・まあ、簡単にはどちらも消えないでしょうから、空気が読めない馬鹿が現れない限りは、今回は情報だけで良しとしましよつ)

当初の予定とは形はかなり変わってしまったが、別段フリートには問題はなかった。

己の思惑通りに進まない事など世の中には溢れている。寧ろフリートにとっては、己の予想通りに進む方がつまらない事が多い。予想通りに進んでも楽しい事は確かにある。

だが、フリートにとっては予想外こそが楽しいのだ。故にフリートは自身の目論見が崩れても対して気にせず、セイバーとランサーの戦いを観戦する。

そして二体のサーヴァントの戦いを見つめていると、ランサーが突き出した深紅の槍によってセイバーが振るっていた不可視の剣が一瞬だけ真の姿である”黄金の剣“を晒す瞬間を目撃する。

(・・・今は・・・なるほど、ランサーの持つ深紅の槍の効果は、”魔力遮断”。効果が及ぶ範囲は、槍の刃辺りまで・・・危険度はディバイダーほどではないですけど、もう一本の槍の効果次第では危険ですね)

冷静にフリートはランサーが持つ宝具の力を分析する。

ランサーが振るう深紅の槍の効果は、一般的な魔術師には脅威だが、フリートにとってにはさほど脅威ではない。生前には魔力を無効化や遮断する技術は存在し、その全てをフリートは使いこなせる。

寧ろフリートが気になるのは、深紅の槍を解放する時に捨てた短槍の方だった。

（恐らくランサーが短槍を捨てた事自体が罠でしょうね。”槍は本来ならば両手で一槍が基本”。ですが、確か居ましたね。聖杯が送って来た知識の中に、魔を断つ赤槍と”呪いの黄槍”を振るう英霊が）

フリートはランサーの正体にたどり着いた。

フィオナ騎士団、随一の戦士。”輝く貌かおのデイルムッド・オディナ。それこそが今回の聖杯戦争でランサーのサーヴァントとして召喚されたランサーの真名。

（フム、かなり私の初戦の相手に相応しいんですけど……誰か居ませんか、空気が読めない馬鹿）

ーピーブツッ！

（ん？）

突然に音を鳴らした眼鏡にフリートは訝しみながら、眼鏡を操作してみる。

すると、雷鳴を鳴り響かせながら空中を疾走する二頭の遅しくも美しい牡牛が牽いている戦車に乗った巨漢の男が、セイバーとランサーが戦っている場所に向かう姿が、右側のレンズに映し出された。

「……………いきましたね、空気が読めない馬鹿が」

真つ直ぐに戦車に乗ってセイバーとランサーが戦っている地点に向かう巨漢の男ライダーのサーヴァントの姿に、フリートは呆然と呟いた。

確かに誰かに介入して欲しいとは思っていたが、まさか本当に空気を読まずに介入して来る人物がいるとはフリートとは思っても見なかった。

しかしこれで、当初の目論見通りに事が運べるとフリートは笑みを浮かべながら、白衣の中から薬が入った小瓶を取り出す。

「……………目的完遂の為とは言え、この薬の効果が消えた後は、凄く嫌なんですよね……………でも、仕方ありません！！我慢しましょう！！」

「……ゴクンッ！」

意を決すると共にフリートは持っていた小瓶の中身を飲み干した。

港場。その場所はセイバーとランサーの激闘によって見る影もないほどに荒れ果てていた。

それを行った張本人達であるセイバーとランサーは互いに油断なく睨み合っていた。

しかしセイバーは本来ならば両手で握る筈の剣を右手だけでしか握っていなかった。ランサーが仕掛けた策にまんまとセイバーは引っかけ、ランサーの二つ目の宝具である”癒えぬ傷を負わせる”

誰もが呆気にとられて言葉を失っているなか、最初に復帰したのは御者台の中でうずくまっていたライダーのマスターであるウェイバー・ベルベットだった。

「何を・・・考えてやがりますかこの馬鹿はあああつ！！」

「ーベシッ！」

「ギャフッ！」

錯乱あまりに掴みかかって来たウェイバーをライダーは無言でデコピンを食らわせて黙らした。

そのままライダーは何事もなかったように、左右にいるセイバーとランサーを見回しながら問いかける。

「うぬらとは聖杯を求めて相争う巡り合わせだが、矛を交える前に問うておくことがある。うぬらが聖杯に何を期するかは知らぬ。だが、今一度考えてみよ。その願望、天地を喰らう大望に比してもなお、まだ重いものであるのかどうか」

「貴様・・・何が言いたい？」

「うむ、噛み砕いて言うとな・・・ひとつ我が軍門に降り、聖杯を余に譲る気はない？さすれば余は貴様らを朋友として、世界を征する快悦を共に分かち合う所存である」

そのイस्कन्दルのあまりの突拍子もない提案に今度こそ誰もが言葉を失った。

セイバーは怒りすら忘れて呆れかえり、対面にいるランサーは話についていけずに途方にくれていた。彼らが参加しているのは、文

字通りの戦争である。

それなのにイスカンドルは、いきなり現れ真名を名乗り、あげくの果てには矛さえも交えていないのに従えと宣告して来たのだ。

英断なのか愚拳なのかは、判断しづらいがこの場においては愚拳に近かった。

「……先に名乗った心意気には感服せんでもないが……その提案には承諾しかねる」

そうランサーは刃物のように威嚇的な眼孔をイスカンドルに向けてながら話す。

「俺が聖杯を捧げるのは、今生にて誓い交わした新たな主君ただ一人だけ。断じて貴様ではないぞ、ライダー」

「そもそも、そんな戯言を述べるために、貴様は私達の勝負に水差したというのか？」

ランサーの宣言に続くように不愉快そうに眉を動かすセイバーが問いかけた。

生真面目な彼女にとっては、ライダーの提案は許しがたいことだった。

「戯れ事が過ぎたな征服王。騎士として許し難い侮辱だ」

「ムウツ………待遇は応相談だか？」

「くどい!!」

なおも言い募るライダーを、セイバーとランサーは一蹴した。

更にセイバーは憮然としたまま言葉を付け加える。

「重ねて言うならば、私もまた一人の王としてブリテンの国を預かる身だ。いかな大王と言えども、臣下に加わる訳にはいかない」

「ほう？ブリテンの王とな？……こりや驚いた。名にしおう騎士王が、こんな小娘だったとは」

「……その小娘の一太刀を浴びてみるか？征服王」

言葉と共にセイバーは剣の構えをライダーに向かってとる。

並々ならぬセイバーの闘気にライダーは困ったように眉をしかめて、深く溜め息を吐く。

「こりやー交渉決裂かあ。勿体ないなあ。残念だなあ」

「ら、い、だあああ」

ライダーが残念さ満ちた声で呟くと同時に、腫れあがった額を押さえながら、どん底まで掠れた声をウェイバーはあげた。

「どうすんだよお。征服とか何とか言いながら、けつきよく総スカンじゃないか……オマエ本気でセイバーとランサーを手下に出来ると思っていたのか？」

「いやまあ、”ものは試し”と言うのではないか」

「”ものは試し”で真名をバラしたンかい!!」

あまりの事実 zu ウェイバーは逆上して、ライダーの胸鎧をポカポ

力と連打しながら泣きじゃくった。

その哀れさを誘う光景にアイリスフィールは、軽蔑したもののか同情したもののか悩んでいると、低く地を這うような怨嗟に満ちた声が鳴り響く。

《そうか、よりもよって貴様か》

「あ……う……」

聞こえてきた憎悪に満ち溢れた声に、ウェイバーは声の主の正体とその理由に行き着き、身体が凍りついた。

ウェイバーは聖杯戦争に参加するに至る経緯の中で、今憎悪の声を隠れながら上げている人物から、イスカンドルを召喚する為の聖遺物を盗みだした経緯があった。

最終的にはイスカンドルの召喚に成功したが、聖遺物を盗まれた人物がウェイバーを許す筈がない。

《いったい何を血迷って私の聖遺物を盗みだしたのかと思ってみれば、よりもよって君自らが聖杯戦争に参加する腹だったとはねえ。ウェイバー・ベルベット君》

「あ……あ……あ……」

《残念だ。実に残念だなあ。可愛い教え子には幸せになってもらいたかったんだがね。ウェイバー、君のような凡才には、凡才なりに凡庸で平和な人生を手に入れられたはずだったのにねえ》

自身が放つ敵意によって恐懼に固まっているウェイバーに、ぞっとするような冷ややかな猫なで声で、隠れているランサーのマスターは、さらに声を続ける。

《致し方ないなあウェイバー君。君については、私が特別に課外授業を受け持つてあげようではないか。魔術師同士が殺し合うという本当の意味。その恐怖と苦痛を余すところなく教えてあげようではないか。光栄に思いたまえ》

そう声の主は、恐怖に身を竦ませているウェイバーに声をかけた。真の魔術師たることは、死を観念することに他ならない。その意味を言葉の上でしか理解していなかったウェイバーは、今こそ身に染みて味わっていた。隠れながら自身に殺意を向けている人物の視線は、それほどまで致命的だった。

だが、この時に隠れているランサーのマスターは決定的な勘違いをしていた。ウェイバーに言った言葉は、自身にも降りかかることに全く気がついていなかったのだ。後に彼は自身が言った全てをその身、彼などでは足下どころか、爪一つ及ばない人物に骨の髄まで絶望を染み込ませてしまふのだった。

最もそんな未来が待っていると知らないランサーはマスターは、恐怖に震えているウェイバーに残虐な視線を向けていると、ウェイバーの肩に優しく力強い手が、ウェイバーの肩におかれる。

「……ポン！」

「ッ！」

「おう魔術師よ。察するに、貴様はこの坊主に成り代わって余のマスターとなる腹だったらしいな」

恐怖に震えていたウェイバーを支えるようにはライダーは、ウェイバーの肩に手をおきながら、いずこかに潜んでいるランサーのマスターに向かって、底意地の悪い憫笑を向ける。

「だとしたら片腹いたいのう。余のマスターであるべき男は、余と共に戦場を馳せる勇者でなければならぬ。姿を晒す度胸さえない臆病者なぞ、役者不足も甚だしいぞ」

そのライダーの言葉と共に沈黙が降り、姿無き者の怒りの気配だけが夜気を伝播する。

ライダーはその気配に剛胆に大笑すると、今度は誰にもなく夜空に向かって大音声で張り上げる。

「おいこら！！他にもおるだろが。闇に紛れて覗き見をしている連中が！！」

「……………どういうことだ、ライダー？」

いきなりのライダーの叫びに、セイバーは怪訝な声で質問し、ランサーも怪訝な顔する。

するとライダーは満面な笑みを浮かべながら、親指を立てて示す。

「セイバー、それにランサーよ。うぬらの真つ向切つての競い合い、まことに見事であった。あれほどに清澄な剣戟を響かせては惹かれて出て来た英霊が、よもや余ひとりということはあるまいて」

ライダーのその宣言にアイリスフィールは、潜んでいる切嗣のことが看破されたのかと肝を冷やす。

しかし、どうやらライダーの意中には他のサーヴァントしがなく、再び辺り一面に轟き渡れとばかりに、大声で呼びかける。

「情けない。情けないのう。冬木に集った英雄豪傑どもよ。このセイバーとランサーはマスターが見せつけた気概に、何も感じること

がないと抜かすか？誇るべき真名を持ち合わせておきながら、コソコソと覗き見に徹するというのなら、腰抜けだわな。英霊が聞いて呆れるわなあ。んん！！」

ライダーはそのままひとくさり豪笑を放つと、不敵な笑みで口元を歪めながら、挑発的な眼差しを周囲の闇に向けて叫ぶ。

「聖杯に招かれし英霊は、今！此処に集うがいい！なおも顔を見せぬ臆病者は、征服王イスカンドルの侮蔑を免れぬものとしれ！！」

そのライダーの大熱弁に、ソレは即座に応じた。

《グオオオオオオオオオオオツ！！！！》

「又ウ！？」

突入として海の方から響き渡ったライダーの大音声の叫びさえもかき消してしまうほどの叫びに、ライダーは海の方に目を向ける。

セイバーとランサーも先ほどの叫びはただごとではないと慌てて海の方に目を向けると、ソレはゆっくりと上空を旋回していた。

ソレの姿を目撃した誰もが言葉を失い、呆然とアイリスフィールドが眩く。

「……………ま、まさか……………そ、そんな！？」

「う、嘘だろう……………誰が、誰が……………アレを……………呼び出したんだ」

「グルウウ！！」

アイリスフィールとウェイバーが現れたソレに掠れた声を出している、ソレは低い唸り声を上げながら、ライダー達を上空から見下ろす。

全長約十メートル以上の大きさを持ち、長い尾を揺れ動かし、赤い鱗で全身を覆った巨大な翼を羽ばたかせている生物。幻想種の頂点に位置する象徴。

魔術師、サーヴァントが絶対に見間違えることがない神秘が彼らの目の前にいた。

「「りゅ、竜種!?!」」

「グオオオオオオオオオオオツ!!」

驚愕に満ち溢れたアイリスフィールとウェイバーの叫びに応じるように、赤き竜は放声を辺りに轟かせた。

その凄まじい放声によって、衝撃波が巻き起こり、セイバーはアイリスフィールを守るように立ち、ライダーはウェイバーの襟を掴む。

その様子を竜は愉しげに眺め、口に魔力を集めようとする直前に、竜の背から声が響く。

「止めよ。今日は挨拶だけで訪れたのだ。お前の炎で終わらせるのは、つまらん」

「グルウウ」

背から聞こえてきた声に、竜は口を集めようとしていた炎を霧散させた。

ライダー達はその竜の動きに、竜を操っている者が背に思っている目を向けると、美しく輝く蒼銀の鎧に身を包み、腰に刀と思わ

しき武器を帯刀した女性が存在していた。

その女性は長い蒼い髪をポニーテールにしてまとめ、冷たい色をした紅い瞳をライダー達に向けながら手綱を握っていた。

「あいにくと、真名の名乗りは封じられているので、代わりにクラス名で我慢して貰おう。私のクラスはキャスター。聖杯戦争で最弱のクラスだ」

そう女性は明らかに性格が変わっているフリートは、皮肉げに自身のクラスをライダー達に告げながら、竜の背に乗ったままライダー達を見下ろすのだった。

「……………出遅れた」

竜の背に乗ったフリートを見つめるライダー達の背後で、寂しげに呟く、街灯のポールの頂点に立つ黄金の英霊がいたが、誰も気がついていなかった。

第二話 参戦（後書き）

今回使用宝具

名称：《見通す魔鏡》

ランク：D

分類：対人宝具

詳細：形は一般的な眼鏡の形をしているが、ありとあらゆるセンサー機能が備わっている。最大百キロ先まではつきりと見え、フリートが作成したサーチャーが捉えている映像も常時見ることが可能。また、視覚からに対する幻影や精神に影響を及ぼす何らかは全て無効化される。

名称：《小バッター一号機》

ランク：E

分類：対人宝具

詳細：対象にした人物を常に監視し、動きを使用者に常に報告する。大きさは手のひらサイズの上に、隠密能力に秀でている。また、自爆機能が備わり、万が一見つかったら、対象者に取り付き自爆するので、決して発見してはいけない。なお、爆発の威力は人が跡形もないほどに変わり果てる威力だが、周りには全く影響が起きないように結界が自動で展開されるので、”周り”は安全である。

名称：《性格変化薬》

ランク：D

分類：対人宝具

詳細：一定時間使用者の性格を変えてしまう秘薬。しかし、使用者は性格が変わっている間の記憶を全て覚えているので、自分らしくない言動に正気に変えられた後に苦しむ。

また、福次効果として、既に精神を変えている影響で洗脳や魅了などの効果は通じない。

第三話 集結（前書き）

活動報告の方にあるフリートのサーヴァントステータスに追加を加えました。

ご意見をくれた方々ありがとうございました。

本編の方は今しばらくお待ちください。

第三話 集結

聖杯戦争に参加する魔術師達が出来ることならば呼び出したくないサーヴァントのクラスが、二つ存在している。

一つは狂戦士のクラスであるバーサーカー。基礎能力が低いサーヴァントを強化するクラスだが、その代わりに他のサーヴァントのクラスに比べて消費魔力は数段勝り、何よりも制御することが最も難しいクラスなのだ。故に聖杯戦争で必勝を確実に狙うのならば、かなり大博打を打たなければならぬ難しいクラス。故に大抵の魔術師は好き好んでバーサーカーのクラスをまず呼ばない。

そしてもう一つの呼び出したくないサーヴァントのクラスがキャスター。魔術師のクラスだった。

その理由は、他のクラスであるセイバー、ランサー、アーチャーの三騎士と呼ばれるクラスにあった。前述した三つクラスには対魔力のスキルが保有される。このスキルは魔力を用いる攻撃を無効化してしまうスキルな為に、どうしても魔術に頼って攻撃してしまうキャスタークラスには、セイバー、ランサー、アーチャーと戦う上で圧倒的なハンデが課せられてしまうのだ。

故にキャスターのクラスは最弱と呼ばれ、召喚されたキャスタークラスのサーヴァントは大抵は陣地作成のスキルを使用して、陣地の中に建て籠もり、向かって来た敵を撃退するのが定石だった。

だが、そんな聖杯戦争の定石を粉碎するキャスターのサーヴァントが、赤い竜の背に乗りながら呆然としているライダー達を見下ろしていた。

「やれやれ、何時まで間の抜けた顔している？其処で叫んだ征服王の呼び掛けに応じて現れたのだ。少しは声を出して欲しいな」

「グルウウ」

性格が完全に変わり、何時も来ている白衣とは違って、戦装束である蒼銀に輝く鎧に身を包んでいるフリートの言葉に同意するように、竜は唸った。

その様子にフリートは冷笑を口元に浮かべ、岸壁に聳え立つデリッククレーンに目を向ける。

「やれ」

「グオオオオオオオオオオオオッ！！」

「ーードグオオオオオオオンッ！！！！」

フリートが命じると共に竜はデリッククレーンに口を向け、閃光がその口から放たれた。

その凄まじい威力にデリッククレーンは破片一つ足りとも残さずに消滅した。

ライダー達はその竜の力に、目の前に滞空している竜は紛れもなく幻想種の頂点に位置する竜種だとはつきり理解した。

しかも今の竜の一撃には余力さえも感じられる。対人宝具ではすまない。対軍、いや対城宝具の域に目の前の竜はいるのだと、その場にいる誰もが理解した。

「フム？・・・まだ、呆然しているのか？よしでは、残り”三つ”。隠れて様子を伺っているネズミを撃つか」

「ゲルウウー！」

「ッ！待てキャスター！」

フリートの宣言に獰猛な笑みを浮かべた竜の姿に、ランサーは慌てて叫んだ。

竜とフリートはこの港場に潜んでいる者に対して攻撃を加えようとしている。

事実、先ほどの攻撃はランサー達は知らない事だが、デリッククレーンに潜んでいたアサシンを狙って攻撃したものだ。

そして港場にはまだ潜んでいる者達がいる。その中にはランサーのマスターもいる。

故にランサーはフリートと竜の行動を慌てて止める為に叫んだのだが、慌てているのはランサーだけではなかった。

「舞弥！すぐにその場から移動しろ！あのキャスターは、僕らのことにも気がついている！」

《了解！すぐに移動します！》

切嗣の指示にインカムの向こうにいる舞弥は答え、即座にその場から移動を開始する。

通信が切れるのを切嗣は確認すると、自身も隠れていたコンテナから離れようと銃器を片付け、最後にフリートと竜に目を向け、気がつく。

フリートがライダー達に向けていた視線が、何時の間にか切嗣へと向けられ、その口元が冷笑に歪んでいることに。

(ッ！？)

切嗣の全身に怖気が走った。

アレは不味い。アレを野放しにしたら何れ取り返しが出来ない何が引き起こされてしまう。

切嗣の今までくぐり抜けて来た修羅場によって鍛えられた第六感

がそう叫んでいた。

しかし、フリートは切嗣への興味を失ったのか、ゆっくりと視線を外し、握っていた手綱を手放すと、竜の背から飛び降りてコンテナの上に降り立つ。

「フリートンツ！」

「さて、征服王とやら、一体いかなる用向きであのような介入を行ってまでランサーとセイバーの尋常な立ち会いを阻んだのだ？ それにあのような他の英霊を臆病者呼ばわりする発言……下らぬ用向きならば、我が契約竜の劫火で焼き尽くしてくれるが？」

「ラ、ライダー！」

「わかつとる！ 安心せよ坊主！」

自身に向かって涙混じりながら叫んで来たウェイバーに対して、ライダーは先ほどセイバーとランサーを勧誘していた時以上の覇気を持って答えた。

ウェイバーはその覇気に満ちた叫びに遂にライダーが本気になったのだと内心で喜ぶ。流石に幻想種の頂点に位置する竜種を従えているような相手を勧誘する気は、剛胆なライダーでも持ってなかったのだと、ウェイバーは安堵の息を吐く。

何せフリートがコンテナに降りたとはいえ、竜は未だに上空に竜は滞空している。対応を間違ったら、即座に火を放って来るのは間違いない。

故に流石にライダーでもフリートは勧誘しないと、ウェイバーは思うが、彼はまだライダーと言う漢を侮っていた。

「そこにいる、キャスターよ！……余の配下にならんか？ 待遇

は相談するぞ！」

「……バタツ！」

晴れやかな笑みと共に親指を立てながら突き出したライダーの姿に、ウェイバーは倒れた。

他のセイバー、ランサー、そしてアイリスフィールも思わず啞然としながらライダーを見つめ、倒れていたウェイバーが起き上がって叫ぶ。

「お、お前は何を言っているんだ！？ア、アレが見えないのか！？りゅ、竜だぞ！？幻想種の頂点！！竜種なんだぞ！？」

「言われんでもわかつとるわ！余も本物の竜を見るのは、初めてだ」

そのライダーの言葉に、ウェイバーは気がつく。

ライダーの瞳がまるで憧れていたモノを目にしたように光り輝いていることに。確かに竜など言う幻想種の頂点に位置する存在を目撃する機会など、幾ら英霊でもないに等しいだろう。

ウェイバー自身、もしも敵として現れなければ呆然と目の前にいる竜を見つめていただろう。

しかし、残念ながら自分達が参加しているのは戦争であり、目の前にいる竜はフリートの契約竜。敵として現れた存在。

しかもライダーはどう考えてもふざけているとしか思えない事を、フリートに告げてしまった。

一体どういふ答えが返って来るのかと、ウェイバーは震えながらフリートに目を向けようとする。

そして背後を振り返ってみると、フリートは額を右手で押さえながら、ライダーを見ていた。

「離れた所で見ても思ったが……このような男に世界は
征服されかけたのか？」

「ハハハハハハハハッ！見よ坊主！竜を従えているキャスターに
も、余は感心されとるぞ！」

「呆れられているんだ！」

豪笑しているライダーに向かってそうウェイバーは叫び、その場
にいる全員が困ったように困惑していると、突然にフリートは身に
着けている鎧の中から一本の笛を取り出す。

そしてそのまま笛を口元に運ぶと、上空に滞空している竜に向か
って笛の音を奏で出す。

―― ～～

「グオオオオオオオオオオオツ！！………キユル～～！」

「か……可愛い」

笛の音と共に竜の身体が光り輝き、光が消えた後には肩に乗れる
ほどに小さくなり、先ほどまでの獰猛な姿など感じさせない愛くる
しい竜が存在していた。

フリートの肩に降り立つ小さな竜の姿に、アイリスフィールドは羨
望の声を出す。竜はまるでアイリスフィールドには目を向けずにフ
リートに擦りよる。

「キユル～～」

「ご苦労だった。しばらくはその姿で休め。そこにいる者の相手に

あの巨体は不利だからな」

肩に乗っている竜を撫でながら視線をライダー達の背後にフリートは向ける。

ライダー達もそれに釣られて背後を振り向いてみると、額に青筋を浮かべた黄金の英霊が街灯のポールの頂上に立っていた。

金色の輝きを発している輝く甲冑の立ち姿に、ウェイバーは思わず息を呑む。

「あいつは……」

昨夜遠坂邸を監視している時に一瞬見ただけだったとはいえ、ウェイバーはポールの頂上に立つ黄金の英霊を見間違えなかった。

間違いなく昨夜、遠坂邸に侵入したアサシンを圧倒的な破壊力で葬り去ったサーヴァントに他ならない。

既にこの場にキャスターであるフリートがいることも考え、更にライダーの呼びかけに応じて現れたのだとすれば、理性を持ち合わせていることになる。それが意味することは、目の前にいる黄金の英霊は狂化しているバーサーカーではないという事実。

となれば、消去法で残るのは、三大騎士クラスの最後の一角であるアーチャー。

フリートを含めたこの場にいる全員が黄金の英霊のクラスを確信していると、アーチャーは青筋を浮かべたままフリート達を見下ろしながら喋りだす。

「我^{オレ}を差し置いて”王”を称する不埒者が、一夜のうちに二匹も湧くだけではなく……我^{オレ}を無視するとは……赦し難き所業」

開口一番、アーチャーである黄金の英霊は声音に隠しきれない怒りを滲ませながら、眼下に対峙する四人のサーヴァントを侮蔑も露

わに見下ろす。

傲然たる態度とその口調は、ライダーの尊大さに近い印象はあるが、根幹から異なっていた。征服王は他者を認めるに対して、王を名乗っているアーチャーは自身以外の他者を対等に認めていない。流石のライダーも自分以上に高飛車な存在の出現に、困惑しながら顎の下を搔く。

「難癖つけられたところでなあ……イスカンドルたる余は、世に知れ渡る征服王に他ならぬのだが」

「たわけ。真の王たる英雄は、天上天下に我^{オレ}ただ独り。あとは有象無象の雑種にすぎん」

(つまり、奴の時代には王と呼べる存在は奴一人だったと言うことだな)

もはや侮辱と呼ぶにも度の過ぎる宣言を、さらりと言い捨てるアーチャーを見ながら、フリートは手に入った情報を吟味していた。

もし先ほどのアーチャーの侮辱としか言えない宣言を聞いたのが、本来のフリートだったら不愉快になって、アーチャーに嫌がらせを行っていただろう。しかし、現在のフリートは戦闘者に近い性格になっっているので、アーチャーの宣言は聞き流していた。

最も性格は変わっていても、逆鱗の部分は変わっていないので、もしアーチャーが逆鱗に触れでもしたら、目的を忘れてアーチャー殲滅に乗り出すだろうが。

そんな風に人知れず死刑台に一番近い場所にいると知らないアーチャーに、フリート同様に先ほどの宣言を聞き流したライダーが、溜息を吐く。

「そこまで言うんなら、まずは名乗りを上げたらどうだ？貴様も王

たる者ならば、まさか己の威名を憚りはすまい？」

「問いを投げるか？雑種風情が、王たるこの我オレに向けて？」

順当に考えれば、理があるライダーの言い分に対して、アーチャーの真紅の双眸は、更に傲岸な怒りを帯びた。

そこには真名を秘めるといふ打算はかんじられない。ただひたすらに感情的なばかりの癩癩しか感じられず、黄金の英霊は募っていた怒りを殺意に変えて放出しだす。

「我が拜謁の栄にしてなお、この面貌を見知らぬと申すなら、そんな蒙昧は生かしておく価値すらない」

そうアーチャーが断じると同時に、アーチャーの背後の左右の空間が陽炎のように歪む。

次の瞬間に、歪んでいる空間から、眩い刃の輝きが忽然と虚空に出現した。

その正体は抜き身の剣と槍。どちらとも目を奪われるような装飾に彩られているだけではなく、隠しようない猛烈な魔力を放っていた。

明らかに尋常な武器ではなく、宝具としか思えない代物。

それは昨夜、アサシンを一方的に抹殺せしめた時に起きた不可解な攻撃の再現。昨夜、遠坂邸を監視していた者達はそれを理解した。ただ一人を除いて。

（なるほど、アーチャーの宝具の正体。そしてその真名が見えた）

誰もがアーチャーの異様に身動きが取れなくなる中、フリートだけがアーチャーの正体にたどり着いていた。

自身もアーチャーに似た宝具だということもあるが、それよりも

基本的に製作者であるフリートは、ランサー、セイバー、そしてライダーの宝具には在るモノが、アーチャーが出現させた宝具には全く無い事を一目見ただけ見抜いていた。

（あの宝具達には、全く使われた気配がない。ライダー達の宝具には在るのに、あの宝具達にはない。つまり、恐らく宝具として存在が確立される前の代物。”原典”。そしてアーチャーの発言）

ただ一人、アーチャーの力に呑まれることなく、フリートだけがアーチャーの真名を看破した。

バビロニアの王にして、人類最古の王と称される存在。この世の全てを手に入れた王。

”英雄王ギルガメッシュ”。それこそが、遠坂時臣が聖杯戦争を確実に勝利するために呼び出したアーチャーの真名。

本来ならば時臣としては、最も隠して起きたい情報だったが、アーチャーの唯我独尊の行動と、フリートという異常な存在のせいで、初戦で看破されてしまった。

（これで五体のサーヴァントの真名と大体の宝具の力の情報は手に入った。初戦とは考えられん戦果だな。残るは、バーサーカーだけだが、現れないところ考えると、別の機会なり・ムツ！）

「グルウウ！」

突如としてあらぬ場所から吹き荒れた魔力の奔流に、フリートは即座に目を向け、フリートの肩に乗っていた竜は警戒するように唸りながら、魔力の奔流が起きている場を睨んだ。

その魔力の奔流に気がついたのはフリートだけではなく、居並ぶ全員が魔力の奔流の発生地地点に目を向け、屈強な人影が実体化する瞬間を目撃する。

セイバーとランサーが戦っていた場所から僅かに離れた地点で実体化した存在は、”影”としか形容出来ない存在だった。

長身で肩幅が広く、一分の隙もなく、底抜けに黒い甲冑で全身を覆い隠し、面貌さえも細く穿たれたスリットから燃える不気味な双眸しか判断出来ない無骨な兜で隠している。

状況から考えれば、新たに現れたサーヴァントは、バーサーカーに間違いない。

此処に聖杯戦争でも、異例中の異例が起きた。フリートが消滅させたアサシンの代わりにやって来た、”新たな三体の隠れ潜んでいるアサシン”を含めれば、初戦にして召喚された全てのサーヴァントが集結したのだから。

しかし、新たに現れたバーサーカーのサーヴァントには、フリートとアーチャー以外の全員が困惑していた。

新たに現れたバーサーカーには他のサーヴァント達がそれぞれ持ち合わせていた”輝き”が全く見えず、ただ”負の波動”しか感じられないのだ。

「……………なあ征服王。アイツには誘いをかけんのか？」

「誘おうにもなあ。ありゃあ、のっけから交渉の余地なさそうだなあ」

油断なくバーサーカーを見据えながら、揶揄するように質問して来たランサーに、流石のライダーも顔を顰めながら答えた。

黒い騎士姿であるバーサーカーが放っているのは、掛け値なしの殺気だけ。魔力から生じた旋風さえも、怨嗟の唸り声と感じるほどに禍々しい。

ライダーもそんな気配を放っている相手と交渉する気力は涌かず、自身の横にいるウェイバーに問う。

「で、坊主よ。サーヴァントとしちゃどの程度のモンだ？アレは」

「……判らない。まるっきり判らない」

「何だあ？貴様とてマスターの端くれであろうが。得手だの不得手だの、色々と”観える”ものなんだろう、ええ？」

英霊と契約しマスターになった者には、他のサーヴァントのステータスを”読み取る”透視力が授けられる。

英霊を招いた聖杯から与えられる、マスターならではの特殊能力。セイバーの背後にいる代行のマスターであるアイリスフィールには不可能だが、ライダーの正式なマスターであるウェイバーには備わっている。

現に目の前にいるセイバー、ランサー、アーチャー、そしてフリートの能力値をウェイバーは把握している。だが、バーサーカーのステータスは。

「見えないんだよ！あの黒いヤツ、間違いなくサーヴァントなのに……ステータスも何も全然読めない！」

「ふむ」

狼狽しきつたウェイバーの弁明に、ライダーは眉を顰めながら、改めてバーサーカーを凝視する。

バーサーカーが纏っている闇色の甲冑には、何の特徴もなく、装着者の素性を判断出来る要素は一切ない。

いや、見れば見るほどにバーサーカーの細部が、ぼやけて、ますます不鮮明になっていく。

その事実にはライダーだけではなく、アイリスフィール、セイバー、ランサーも気がつく、黙ってバーサーカーを凝視していたフリー

トが呟く。

「なるほど・・・あのサーヴァント。生前はどうやら誰かに扮装した逸話を持った英霊のようだな」

「ムツ？・・・キャスターよ？何か気がついたのか？」

フリートの呟きを耳にしたライダーは、フリートに目を向けた。それは他の者達も一緒なのか、その場にいる全員がフリートに目を向けると、フリートはバーサーカーを見ながら話す。

「あのバーサーカーが纏っている闇は、知ろうとすればするほどに深まっている。つまり、自身の正体を隠して起きたいという逸話から生まれた特殊能力なのだろう。そして僅かに判別出来るところから見て、生前は騎士の類に違いない」

「ほお。僅かな観察で其処まで見切るとは」

フリートのバーサーカーに対する推測に、ライダーは思わず感嘆した。

自分達が全くバーサーカーの素性に関する情報が手に入らないと頭を悩ましていたのに、フリートはほんの少しだけの情報で、バーサーカーの生前に関する事柄を見抜いた。

卓越した知力と分析能力にアーチャーを覗いた全員がフリートに対する警戒を強めていると、バーサーカーがゆっくりと街灯の上に立つアーチャーに身体を向け出す。

「誰の許しを得て我を見ておる？狂犬めが・・・」

自身に向かっておぞましい視線を向けてくるバーサーカーに、ア

アーチャーは耐え難い屈辱を感じた。
そしてアーチャーの背後に浮いていた宝剣と宝槍が、反転して切っ先がバーサーカーに向けられる。

「せめて散りざままで我を興じさせよ。雑種」

アーードン！ドーン！

アーチャーが冷徹な宣告を放つと共に、剣と槍が虚空を走った。その攻撃は遠距離攻撃を行える者からすれば、杜撰としか言えない投擲だったが、それでも宝具には違いなく、破壊力は絶大だった。まるで発破をかけられたかのように路面は砕け、バーサーカーがいた地点は木っ端微塵に砕けたアスファルトが粉塵となつて視界を覆い隠していた。

《………ツ！！》

僅かに粉塵が薄れた瞬間、アーチャーとフリートを除いた全員が息を呑んだ。

舞い上がった粉塵が薄れていく中で、バーサーカーは健在だった。そのバーサーカーが立っている地点から、僅かに逸れた足元に、クレータ状に抉れた路面に突き刺さる槍が存在し、バーサーカーの手には剣が握られていた。

バーサーカーはあの一瞬の間に、自身に向かって飛来した宝剣を掴み取り、獲得した獲物を使って、宝槍を打ち払ったのだ。

「………奴め、本当にバーサーカーか？」

自身が目撃したバーサーカーの凄まじい技巧に、ランサーは張り詰めた声で呟き、ライダーもバーサーカーの技巧には唸ざるえな

った。

「狂化して理性を無くしているにしては、えらく芸達者な奴よのう」
(さて、いかなる力を使ってあの握っている宝剣を操った)

注意深くバーサーカーを見ながら、フリートはバーサーカーの力を見極めようとする。

宝具とは、そもそも使い手である英霊のためだけに特化した専用の武器。アーチャーやフリートのように特殊な宝具も存在するが、バーサーカーのように手に入れたばかりの宝具を自在に操るなど本来は不可能。

それを実行せしめたバーサーカーも、恐らくは特殊な宝具の類の所持者だと考えながら見極め初める。

(……ん？違う……まさか！？奴の力は！？)

「……その汚らしい手で、我が宝物に触れるとは……そこまで死に急ぐか、狗ッ！！」

怒りの叫びと共に、再びアーチャーの周囲が揺らめき、新たな宝具の群れが出現する。

その数、十六挺。しかも槍や剣だけではなく、斧、槌、矛、更には用途や素性も知れない奇怪な刃物さえもある。それら全てが正真正銘の宝具。

「そんな、馬鹿な……」

新たな宝具の数々の出現に、ウェイバーは思わず呻いた。

それはアーチャーの真名にたどり着いたフリートを除いた全員が

同じ気持ちだろう。無尽蔵に宝具を所持しているなど、それは異常としか言えない状況。

しかもアーチャーは昨夜の対アサシンの時も踏まえて、同じ武器は使用していないのだから。

「その小癩な手癖の悪さでもって、どこまで凌ぎきれるか……さあ、見せてみよ！」

ーードトドトドトドトドトツー！！

アーチャーの号令と共に、虚空に浮かんでいた宝具の群れが先を争ってバーサーカーに殺到した。

絨毯爆撃と見間違う攻撃。しかし、その攻撃の標的となっているバーサーカーも異常な存在だった。

いの一番飛来した矛を左手で掴み取ったと思えば、握っていた右手の剣と共に縦横無尽に振るい、宝具の洗礼を打ち返します。

その技巧は狂化して理性を失っているとは信じられないほどに、精緻に華麗だった。

「……どうやらあの金色は宝具の数が自慢らしいが、だとするとあの黒いやつとは相性が最悪だな……おまえさんもそう思うだろう？ キャスター」

「確かに同意見だ。バーサーカーの方は強い武器を拾えば拾うだけ強くなる。アーチャーの攻撃は自ら深みに嵌る一方ではない……・最もあのバーサーカーも”二本”までが限界のようだが」

「なぬう？ ソイツは一体どういう意味……」

ーードゴオンツー！！

フリートの意味深な言葉について質問しようとした瞬間、ひときわ大きな轟音が響いた。

その音にライダーが戦いの場に目を戻してみると、倒壊した建造物の影響で粉塵が立ち込める中で、左手に片刃の曲刀を握り、右手に戦斧を握ったバーサーカーが立っていた。

アーチャーの攻撃を全てバーサーカーは退けたのだ。その証拠にバーサーカーの足元には宝具が散らばっていた。

その実力にセイバーとランサーは戦慄する。いずれ聖杯戦争を勝ち残っていけば、アーチャーとバーサーカーとも矛を交える展開もありえる。だが、どういう処方で立ち向かえばいいのかと悩む。

そして注目されているバーサーカーは、何気になく手元に残っていた二本の宝具を掲げ、予備動作もなくアーチャーに向かって投擲する。しかし、狙いが曖昧だったのか、二本の宝具はアーチャーの足場のポールに向かい、バターののようにポールを寸断する。

「ザーザンッ！」

「ギーギギキッ！ドン！」

寸断されたポールは地響きを立てながら倒壊した。

そして街灯の頂点に立っていたアーチャーは、街灯が倒れる前に身を翻し、何事もなかったように地面に着地するが、その面貌は凶相に変わっていた。

「痴れ者が……天に仰ぎ見るべきこの我を、同じ大地に立たせるかッ！その不敬は万死に値する。そこな雑種よ、もはや肉片ひとつ残さぬぞ！！」

怒りによって紅蓮に燃える双眸をバーサーカーに向けながら、ア

アーチャーは吼えると共にみたび背後の空間を歪ませて、宝具の群れを呼び出す。

その数は先ほど倍の三十二。流石の今度ばかりはライダーも押し黙った。アーチャーの潜在力は、フリート以外の誰にも計りきれなかったのだ。

そして憎悪に燃える視線をバーサーカーに向け、アーチャーが号令を放とうとした瞬間、その視線はあらぬ方角に転じた。

その視線の先に何が在るのかを悟ったフリートは、アーチャーとバーサーカーの戦いは終わりだと確信する。

「貴様ごときの諫言で、王たる私の怒りを鎮めると？大きく出たな、時臣……命拾いしたな、狂犬」

さも忌々しげに吐き捨てながら、アーチャーは展開していた宝具の群れを納めた。

そのままアーチャーは居並ぶサーヴァント達に目を向ける。

「雑種ども。次までに有象無象を間引いておけ。我と見えるのは真の英雄のみで良い」

最後まで傲慢な言葉を言いながら、アーチャーは実体化を解き、この場から去って行った。

アーチャーが残していた輝きの残滓が漂う場所を見ながら、ライダーは苦笑する。

「フムン。どうやらアレのマスターは、アーチャー自身ほどに豪傑な質ではなかったようだな」

呆れた風にライダーは苦笑しながら呟くが、そんな暢気な場合ではなかった。アーチャーに負けず劣らず脅威であったバーサーカー

「なん・・・だと？」

目の前の広がる事実には、セイバーは思わず目を疑った。

バーサーカーが手にしている鉄柱には、葉脈のように黒い筋が幾重にも絡みつき、鉄柱全体を覆うように広がっていた。

その黒い筋の起点はバーサーカーの両手。バーサーカーが身に着けている籠手に掴まれた箇所から、蜘蛛の巣状にバーサーカーの魔力が鉄柱全体に浸透していたのだ。

「貴様は！？まさか！？」

「・・・そういうことか。あの黒いのが掴んだものは、何であれヤツの宝具になるわけか」

バーサーカーの宝具の正体をセイバーが驚愕と共に理解すると同時に、見守っていたランサーとライダーも同じ結論にたどり着いていた。

バーサーカーの宝具は、槍や剣と言った形ではなく、特殊能力型の宝具だった。しかもその能力は恐ろしい力だった。

何せアーチャーの宝具の支配権を乗っ取るだけでなく、ただの鉄屑がセイバーの持つ宝剣と鏢迫りあうほどに強化してしまうのだから。

アーチャーとは別の意味で、無尽蔵に宝具を持ち合わせている強敵の出現に、ランサー、ウェイバー、アイリスフィールは驚くが、ライダーだけは静かに肩に竜を乗せながら、豪快な槍捌きでセイバーを攻め立てているバーサーカーを見ているフリートに横目を向ける。

（こやつ・・・・・・バーサーカーの宝具を短時間で見抜きおった。余でさえ、セイバーと鏢迫りあっているとこを見て漸くたどり着い

たというのに……何者なのだ？)

よくよく考えてみれば、得体の知れない存在がもう一人いたことにライダーは気がついた。

竜という幻想種の頂点を従え、卓越した知力と分析能力を示したフリートもライダーを持つてしても底が見えない。

寧ろ見せている部分さえも、本人からすれば冰山から僅かに落ちる粉雪でしかない印象が感じられる。

そういう風にライダーがフリートに対して疑念を募らせている間にもセイバーとバーサーカーの戦いは続いていた。

しかし、バーサーカーの猛攻の前にセイバーは防戦一方だった。ここにきてランサーの《必滅の黄薔薇》^{ゲイ・ボウ}によって負わされた左手の傷が響いていた。

右手だけの握力でしか剣は振るえず、固有スキルの《魔力放出》でサポートとして何とかバーサーカーの猛攻を応戦の猛攻するのに限界だった。

だが、何時までも凌ぎきれぬ訳がない。しかし、それでも弱みを見せる訳にはセイバーはいかなかった。

傍観に徹しているライダーとフリートへの牽制をバーサーカーとの互角の拮抗で示さなければ、この状況をつけ込まれしまう。

だが、戦っているバーサーカーも相当な手練れだった。手負いとはいえ、最強のサーヴァントであるセイバーに反撃の隙を与えないのだから。

「ッ……」

「貴様は、一体!？」

そのセイバーの質問に対して、バーサーカーは裂帛の気合いと共に鉄柱を振りかぶる。

大技を使い、ガードもろともセイバーの矮躯を叩き潰そうとする。

「ッ!!」

「・・・悪ふざけはその程度にして貰おうか、バーサーカー」

「ーザーザンツ！」

セイバーに鉄柱が振り下ろされる直前、一条の紅き閃光が走り、バーサーカーが握っていた鉄柱は半ば辺りで両断された。

それを成したのは、セイバーの前に立つ長槍と短槍の二槍を握った槍兵。

右手に握る赤き長槍―打ち合った魔力を打ち消す力を宿す《破魔の紅薔薇》ゲイ・ジャゲルの切っ先をバーサーカーに向けて構えているランサーだった。

魔力を浸透させて疑似宝具にいかなる物でも変えられるバーサーカーの宝具に対して、ランサーの魔力を打ち消す《破魔の紅薔薇》ゲイ・ジャゲルは有効な宝具。

ランサーの前では、バーサーカーの宝具は少なくともこの場では無意味に近いモノなのだ。

「そのセイバーには、この俺との先約があつてな・・・これ以上つまらん茶々を入れるつもりならば、俺とて黙ってはおらんぞ？」

「ランサー・・・」

死闘最中ながらも、セイバーには決然と立つランサーの姿に感極まるものがあつた。

ランサーの誇りの形は、まさに彼女が奉ずる”騎士道”に忠実。

しかし、この場にそれを天晴れと評しない者がいた。
それがランサーのマスターだった。

《何をしているランサー？セイバーを倒すなら、今こそが好機である》

「我が主！セイバーは！必ずやこのディルムッド・オディナが誇りに懸けて討ち果たします！お望みなら、その狂犬めも先に仕留めて御覧に入れましょう。故にどうか、我が主よ！この私とセイバーとの決着だけは尋常に・・・」

《ならぬ》

ランサーの熱を帯びた嘆願を非情に断ち切り、ランサーマスターはよりいっそうに冷やかにサーヴァントが逃れることが出来ない命令を下す。

《ランサー、バーサーカーと共にセイバーを殺せ。令呪をもって命じる》

令呪。その意味を理解する者全員が、その場の空気が凍りつくのを感じた。

サーヴァントに対する三度の絶対命令権。そしてそれを使用されて命じられたランサーにはもはや自由意思はない。

セイバーは視界の中で、ランサーの槍が反転するのを目撃し、素早くその場から飛び退いた。

同時にランサーの槍がセイバーがいた場所を擦過し空を切った。

「ランサー・・・ッ！！」

ランサーに呼びかけようとセイバーはするが、途中で言葉に詰まった。

セイバーに向き直ったランサーの顔は、怒りと屈辱に歪みきった悲痛きわまりない状態だった。

それだけで英霊ディルムツドの心中は理解出来るが、令呪に束縛されたランサーにはどうすることも出来ない。

ただ命令通りにバーサーカーと共闘して、セイバーを殺すしかないのだ。

そんなランサーの傍らに、半分ほどの長さになった鉄柱を長剣のように構えたバーサーカーが並ぶ。

まさしくセイバーは絶対絶命。左手のハンデがあるだけではなく、ランサーまで敵側に回ってしまった。

「セイバー……すまん」

「…………アイリスフィール、この場は私が食い止めます。その隙に…………せめて貴女だけでも離脱して下さい。できる限り遠くまで」

セイバーは淡々とアイリスフィールに向けて目配せを行いながら、目の前に立って圧倒的な脅威に静かな眼差しで見据えた。

このままではアイリスフィールも確実に死んでしまう。故に誇り高きセイバーは自らの命と引き換えに活路を拓こうとする。

その問いにアイリスフィールが答えようとした瞬間、バーサーカーがセイバーに向かって疾駆する。

「ッ！！」

「セイバーッ！！」

「クッ!!」

アイリスフィールの悲痛な叫びに、セイバーはバーサーカーに対して剣を構え、次の瞬間、バーサーカーは背後に向かって吹き飛んだ。

「ードゴオンッ!!」

「!?!」

「……えっ?」

「なっ!?!」

目の前で起きた光景にアイリスフィールは疑問の声を出し、セイバーは自身が目撃した光景に驚愕した。

それはランサーも同様だった。彼も目撃していたのだ。バーサーカーが吹き飛ぶ直前にセイバーとバーサーカーの間に入り込んだ蒼い閃光を。

そしてバーサーカーを吹き飛ばした張本人は、振り抜いた左拳をゆっくりと腰あたりに移動させながら右手に握っている刀身までも黒く染まった刀を、ランサーと起き上がるうとしてしているバーサーカーに向かって構える。

「ースチャッ!」

「気に入らないやり方故に、ランサーの代わりに私が助力させて貰うぞ、セイバー」

そう不敵な笑みを浮かべながら、フリートは背後で呆然としてい

るセイバーに声を掛けるのだった。

「……………又ウ……………少し出遅れてしまった」

フリート同様にセイバー達の戦いに介入しようとしていたライダーが、自身の戦車の手綱を所在なさげに握っていた。

第三話 集結（後書き）

今回使用宝具

名称：《竜巫女より生まれし笛》

ランク：A++

分類：対城宝具

詳細：異世界の竜が住むアルザスの竜を使役することが出来る宝具。本来の持つべき巫女が使用すれば、アルザスに住む竜を全て召喚することが可能なのだが、フリートでは契約している竜のみ。とある異世界移動の技術も組み込まれているので、例え異世界でも竜召喚は可能。

第四話 魔剣

その場にいる全員がセイバーを守るように立ち、バーサーカーとランサーに向かって黒塗りの刀を構えているフリートの姿に困惑を隠せなかった。

誰もがこの場において、キャスターのサーヴァントであるフリートの参戦は有りえないと思っていた。

フリートのクラスは魔術師のキャスター。

故にランサーのマスターで在るケイネス同様に、自身に利益がないこの場では動くはずがないと思っていた。

だが、今フリートはセイバーを守るように立ち塞がっている。

「・・・何故？私を守るのですか？キャスターの貴女が？」

「フム・・・理由は至極簡単だ。ランサーのマスターの行動は、ハッキリ言って私に取って不利益しかない。だから、参戦したのだ」

「何？」

セイバーはフリートの言葉の意味が分からなかった。

しかし、実際にケイネスの行動はフリートに取って不利益どころか、一部を除いて有害でしかない。

今しばらくはサーヴァントとは誰一人として欠けて貰う訳にはいかない。故に初戦でセイバーが消えるなど、フリートに取っては在ってはならないことなのだ。

（セイバーが消滅したら、折角回収していたセイバーの髪や血が消滅してしまう。そんなことを許せるか！）

フリートがセイバーの助力を行った一番の理由は、回収していたセイバーの髪や血液を守る為だった。

サーヴァントは完全に消滅しないかぎり、身体から離れた部分の髪や血液はその場に留まる。だが、その髪や血液の持ち主であるサーヴァントが完全に消滅すれば、同時にそれらも魔力に変わって消滅してしまうのだ。

そんなことを例え性格が変わっていてもフリートが許す筈がなかった。

「聞こえているか？ランサーのマスター。貴様の行いは、ハツキリ言っただけに取って有害以外の何ものでもない。今すぐにランサーを退かせるならば、無駄な労力を使わずに済むぞ？」

《それは私のセリフだ、最弱のサーヴァント。貴様の邪魔さえ無ければ、セイバーを討ち取れていたと言うのに》

「セイバーを討ち取れていた？・・・なるほど、確かに」邪魔さえ入らなければ、セイバーを討ち取れていたかもしれんな。だが、その後はどうなっていたと思っっている？」

《何？》

「よもや貴様、理性を失っているバーサーカーがセイバーを協力して倒してくれたランサーに感謝するとも思っていたのか？そんな筈が在るまい。この場では確かに退く可能性は在るが、次は確実にランサーを討ち取りにバーサーカーは動く。つまり、万全の状態ではバーサーカーは再び現れる。あのアーチャーの常軌逸した攻撃を、”無傷”でぐり抜けたバーサーカーが万全の状態で」

《ッ！！》

フリートが告げた事実には隠れているケイネスが、息を呑む気配が空気から伝わってきた。

「視野が狭過ぎるな。戦いとは一度や二度ではない。ましてや、この争いは戦争だ。短期ばかり見ていては勝てる訳がない。既にセイバーは宝具を使用出来ない。ならば、この場ではバーサーカーをランサーとセイバーの二人がかりで攻め、ランサーの力でセイバー同様にバーサーカーに回復が不可能な傷を負わせれば良かったのだ。まさか、自分が召喚した英霊の力も把握していなかったのか？だとしたら、貴様は戦う者としても探求者としても”三流”だ」

《ッ！！き、貴様！？》

「それ以上の我が主の侮辱は許さんぞ、キャスター」

フリートの言葉にケイネスが怒りを露わにしようとした直前、両手に握る二槍をフリートに向かってランサーは構えた。

「それ以上の我が主の侮辱を許すと思っているのか？」

「侮辱だと？・・・ランサー、私はこれでもかなり怒っているのだぞ。何せ貴様のマスターの馬鹿な令呪の使い方のせい、バーサーカーを労せずして倒せる千載一遇の好機が消えたのだからな”」

「何！？それは一体どう言う・・・」

「ッ！！」

「……バキイイイン！！」

《ツー！！》

バーサーカーの叫びと共に響いた、何が割れ砕ける音にフリートを除いた全員がバーサーカーに目を向けた。

そして目を向けられたバーサーカーはゆっくりと自身の両腕を確かめるように動かし、更に高まった殺意の波動をセイバーだけではなく、フリートにも向ける。

バーサーカーのその様子にフリートがバーサーカーに対して何かを行っていたのだとその場にいる全員が悟り、フリートは自身がバーサーカーに仕掛けたこと簡潔に話す。

「先ほど殴り飛ばした時に、バーサーカーの両手に強力な縛りを施しておいた。先ほどの砕ける音はその術をバーサーカーが破壊した音だ。つまり、バーサーカーはそれまで一切両手が使えなかったと言ふことだ」

「なツ！？それでは！？」

「そう。バーサーカーの宝具の起点は両手の籠手。両手が使えなければ、その力は全く使えない。私の術で両手が使えなかったバーサーカーは、あまり労力を使わなくて倒せた筈なのだが」

言葉と共にフリートは意味深な視線をランサーに送り、セイバーは何故フリートがバーサーカーに対して追撃を行わなかったのかを悟った。

令呪によってランサーはバーサーカーの援護を命じられてしまっている。当然ながらランサー自身にも被害が及ばない限り、バーサーカーの援護にランサーの身体は勝手に動くだろう。

つまり、フリートが作り上げたバーサーカーをあまり労せずして倒せる千載一遇の機会が、ケイネスが使用した令呪のせいで失われてしまったのだ。

「大方セイバーのステータスを見て判断したのだろうが……下らん。敵の宝具を奪える能力を持ったバーサーカーこそが一番の脅威だ。みすみす逃したな。得体の知れない存在を、簡単に討ち取れたチャンス。フフフッ」

「……おい、ライダー」

「ああ、余にもわかつとる、坊主……あのキャスター……涼しい顔をしとるが……よほど内心ではランサーのマスターに対して怒つとるみたいだわなあ」

さしものライダーも、徹底的にケイネスのプライドをボコボコにしているフリートに、冷や汗を隠せなかった。

その場にいる誰もが悟っていた。

”フリートがバーサーカーに対して行った縛りは、ケイネスのプライドをボコボコにする為だけに行った”と言う事実。

確実に今頃はケイネスの顔は怒りと屈辱に歪んでいると、弟子だったウェイバーは確信する。

それを肯定するように凄まじい怒気が放たれる。

《ランサーッ！！そこにいる無礼者も討ち取れッ！！》

「はッ！！」

(フッ。自らのプライドに固執している奴は、余りにも手応えがない)

ケイネスの指示にフリートは内心で喝采を上げた。全て自身の思惑通り。後は当初の予定通りに進めるだけ。そうフリートは思いながら、右手に握っている刀を構え直し、背後にいるセイバーに声を掛ける。

「そう言うことだ。ランサーは私が押さえる。バーサーカーの相手は頼むぞ」

「……分かりました。此処は貴女への貸しにしておきます。ですが、ランサーの槍は」

「重々承知している。安心しろ。この身を屈伏させられるのは、生前共に過ごした者達だけだ！」

「……ドンッ!!」

叫ぶと同時にフリートはランサーに向かって飛びかかった。

その動きにランサーは素早く右手に握る長槍を構え、神速の突きを放つ。

「はッ!!」

「フッ!!」

「……ギイイイイン!!」

ランサーの神速の突きを、フリートは右手に握った刀で受け流した。

その時にフリートに生まれた左側の際に向かって、ランサーは左

手に握っていた短槍をなぎ払う。

「貰った！」

「――ガキイイイン！！」

「なっ！？鞆だと！？」

ランサーの短槍がフリートに届く直前、フリートは左腰に差していた鞆を素早く抜き取り、短槍を弾いた。

そのまま二刀流のように両手に握った刀と鞆をフリートは持ち直し、ランサーと攻防を繰り返す。

フリートとランサーの戦いを離れたところから見ていたウェイバーとアイリスフィールは、ランサーと互角に戦っているフリートの技量に唖然とせざるえなかった。

キャスターのクラスは、そうじて肉弾戦の技量は低いはず。だが、そのキャスターである筈のフリートが、ランサーと互角の攻防を繰り返している。

「・・・こりゃあ、余も見誤っておったわ。竜なんぞに乗ってキャスターを名乗っておったから、てっきり竜を支援して戦う奴だと思っておいたら・・・中々に接近戦もこなしておる」

ライダーの呟いた言葉は、ウェイバーとアイリスフィールも同じ思いだった。

竜と言う幻想種を従えているばかりか、接近戦までフリートはこなしている。

死角が見えないとウェイバーが頭を悩ませていると、フツと先ほどまでフリートの肩に乗っていたモノが消えていることに気がつく。

「アレ？・・・そう言えば、あの竜はどこに行ったんだ」

「モオ〜モオ〜」

「キュル」

「ん？」

聞こえてきた二つの鳴き声に、ウェイバーが戦車の先の方を見てみると、牡牛の一頭の頭の上に乗っている竜を発見する。

「キュル、キュキュル？」

「モオ〜モオ〜オオ〜」

「キュル」

「オオ！？坊主見る！ゼウスの子らと、竜の間に友好が生まれておるぞー！」

(いや、何か凄まじく違う気がする)

ウェイバーは何故か分からなかったが、ライダーの言葉は間違っているかと確信していた。

二頭の牡牛と竜は、友情を結んでいると言うよりも、互いの主人の愚痴を言い合っているような印象をウェイバーは感じる。

何故か遠からず自身も種族の差を踏み越えて、あの輪の中に入ってしまうような未来が待っていると、ウェイバーの中の何が囁くが、そんな未来はごめんなので現実に目を戻す。

フリートとランサーの攻防は、相変わらず一進一退だった。

隙あらば互いに攻撃を繰り返し、それを防いでいる。少なくとも武器を使った戦いは互角にしかウェイバーには見えなかった。そう武器を使った戦いだけならば。

「祖は銀雪。穿つは槍」

(馬鹿な！？これだけの攻防をしながら詠唱だと！？)

聞こえてきた詠唱にランサーは驚愕せざるえなかった。

魔術の発動には精神集中が必要。大規模な魔術で在れば在るほどに、発動させる為には尚更にそれに精神集中が必要な筈。

しかし、今フリートはランサーと攻防を繰り返しながら詠唱を行っている。

本来ならばランサーが攻めきるチャンスなのだが、フリートの剣は詠唱をしながらも一切鈍りはなかった。

「――ダン！」

「放たれよ！氷結槍！！」

「――ザザザザザザッ！！」

詠唱が完成すると同時にフリートはランサーから距離を取るように離れ、素早く自身の周りに発生させていた氷の槍を撃ち出した。ランサーは迫り来る氷の槍を目撃すると、迷うことなく前に進み出る。

ランサーのクラスにはセイバーのクラスほどではないにしても《対魔力》のスキルが保有される。例えば打ち消せなくても、自身の《破魔の紅薔薇》ゲイ・ジャゲルならば、魔力で作れた氷の槍を打ち消せる。

故にランサーは前進を選択するが、次の瞬間、ランサーに迫って

いた全ての氷の槍が碎ける。

「碎けよ！」

「ドーンッ！」

「何!？」

フリートの指示通りに氷の槍は碎け散り、視界を埋め尽くすように発生した白い冷気にランサーの視界は遮れ、足が止まった。

《対魔力》と言っても、発生した現象は無効化出来ない。あくまで《対魔力》は、魔力を用いた攻撃にしか作用しない。

ランサーの視界を覆い尽くす冷気を《対魔力》で無効化することも、《破魔の紅薔薇》グレイ・ジャグルで打ち消すことも無理なのだ。

「天鳴る轟雷。天空より降り注ぎ、我が敵に裁き下せ」

「ゴロゴロッ！」

「まさか!？」

聞こえて来た雷の鳴り響く音にランサーが空を見上げみると、雷雲に向かって左手を伸ばしながら空に浮かんでいるフリートがいた。そしてそのままフリートは自身を見上げているランサーに向かつて左手を振り下ろす。

「汝の意を知らしめん為に、高き天空より降り注げ!! 迅雷!!」

「ビカアアアアン!!」

「ーードゴオオオオン！！」

「……で、天候操作……う、嘘だろっ？……ま、魔法の領域じゃないか」

目の前で起きた出来事に、ウェイバーは全身の震えが抑えられなかった。

それは同じ魔術師であるアイリスフィールも同じ気持ちだった。天候を操れる魔術師など現代には存在していない。

更には、空から落ちて来た雷はランサーがいた地点以外に全く影響を及ぼしていない。

完全に天候操作しているフリートの力に、魔術師であるウェイバーとアイリスフィールが言葉を無くしていると、空に浮かんでいたフリートがゆつくりとアスファルトの上に着地する。

「ーートンッ」

「……今ので決めるつもりだったのだが。最速の名は伊達ではないな、ランサー」

自身が起こした雷の落下地点に目を向けながらフリートが呟くと、吹き荒れていた煙の中から所々に火傷を負いながらも、戦意が全く衰えていないランサーが出てくる。

フリートがその様子を楽しげに眺めていると、ランサーが話しかけて来る。

「……今のは危なかった。まさか、天候を操って雷を引き起こすとは……後一步《破魔の紅薔薇》ゲイ・ジャゲルを投げるのが遅かったら、討ち取られていたかも知れんな」

「ど、どういう意味だ、ライダー？」

「……先ほどの雷が落下して来る一瞬……ランサーは避けられぬと判断するやいなや、自身の槍を空に向かって投げおつた。それによって一際大きな雷は霧散し、後は威力が劣る小規模な雷だけが残り、ランサーは自身へのダメージを最小限に抑えたのだ」

ライダーが告げた事実^にウェイバーと聞いていたアイリスフィールは言葉が出せなかった。

あのほんの僅か一瞬の間に、それだけの高度な戦いが繰り広げられていた。

直前に視界を塞ぎ、大規模な天候操作を駆使したフリートも、それだけの攻撃を最小限のダメージで逃れたランサーも、共に並みサーヴァントでは無いと二人の戦いを見ていた誰も^が理解する。

そしてランサーはフリートの動きを警戒しながら、近くに落ちていた《破魔の紅薔薇》^{ゲイ・ジャゲル}を右手に持ち、フリートに向かって構える。

「……スチャツ！」

「恐るべき戦術だったが、俺の《破魔の紅薔薇》^{ゲイ・ジャゲル}の前では決定的ではなかったな。更に貴様は左手を自由に動かす為に、鞘を捨てた。もはや、先ほどまでのようには俺との斬り合いは出来まい」

「確かに……正直言っただ少予想を超えていた……やれやれ、出来れば使いたくなかったが、使わざるえないか」

「何？」

フリートの意味深な言葉に、ランサーは訝しみながらフリートを見つめると、フリートは右手に握っていた刀をアスファルトに突き

刺す。

ーードスッ

「さてランサー。私にこれを使わせることを後悔するぞ」

言葉と共にフリートは鎧の中から小刀を取り出した。

その小刀にランサーだけではなく、戦いを見ていたライダー、ウエイバー、アイリスフィールは疑問を抱かざるえなかった。

確か魔力は感じられる。だが、宝具と呼べるほどの魔力は感じられず。かと言って魔力が全く感じられない訳ではない。

一体何なのかとランサー達が疑問を抱いていると、フリートは前に向かって小刀を構え、迷うことなく左手の手の平に深々と突き刺す。

ーードスッ!!

「目覚める。《猛毒の一角》、リアクト」

ーードゴオオオオン!!

《なっ!?!》

小さな声でフリートが呟くと同時に、凄まじい魔力がフリートを中心に吹き荒れた。

その魔力にランサー達が驚愕していると、吹き荒れていた魔力は徐々に薄れ、両手に禍々しい魔力を放っている、長剣と短刀を握ったフリートが立っていた。

「紹介しよう。これが私の宝具。《魔導殺しの双剣》ケーニツヒ・

リアクテッド。ありとあらゆる魔導を否定する剣だ」

「何だと!?!」

「さて、長話は終わりだ。時間が迫っている。一瞬足りとも目を逸らすな。逸らせば、お前は死ぬぞ」

「ーードンッ!」

「クッ!」

言葉と共に突進して来たフリートに対して、ランサーは即座に迎え撃つように二槍を構えた。

それに対してフリートは右手に握っている長剣の方のケーニツヒを、ランサーに向かって振り抜く。

「ハアッ!」

「舐めるな!」

「ーーガキイイイン!!」

(何だ!?! キャスターの力が上がっている!?)

フリートが振り抜いたケーニツヒを《ゲイ・ボウ必滅の黄薔薇》で防御したランサーは、伝わって来た衝撃に違和感を覚えた。

先ほどまでよりも、明らかにフリートの力が上がっている。宝具を解放したとは言え、明らかにフリートの力は異常なレベルで引き上がっていた。

そのことにランサーは疑問を抱きながら、フリートが振り抜いて

来る二刀のケーニツヒを防いでいると、フツとフリートが振るっているケーニツヒに魔力が集中している事に気がつく。

「ゴオオオオオツ!!」

「まさか!?!」

「気がついたか?フツ!!」

「ガキイイイン!!」

「グウツ!!」

フリートが振り抜いたケーニツヒの一撃によって、ランサーは防御していながらも吹き飛んだ。

しかし、ランサーは空中で態勢を整えると、危なげなくアスファルトに着地し、警戒するようにフリートを睨む。

「……何という厄介な。その剣。大気中に存在している魔力を吸収して強化する剣だな?」

「正解だ。加えて言えば、貴様の持つ《破魔の紅薔薇》ゲイ・ジャゲル同様に魔力を打ち消す力も宿っている。最もその効力は、”私の周り全体”だから」

《ツ!!》

「何と厄介な剣なのだ。あの剣の握つとるだけで、魔力を用いた攻撃が通じなくなるとは」

流石のライダーも、ケーニツヒに宿る力には唖ざるえなかった。

魔力を用いた攻撃が全て無効化されると言うことは、ライダーの戦車を牽く牡牛が発生させる雷も無効化されてしまう。

ランサーの《破魔の紅薔薇》ゲイ・ジャケルにも、魔力を打ち消す力が宿っているが、その範囲は刃先だけ。

フリートの握るケーニツヒは、その名の通り《魔導殺し》の名が相応しい剣だった。

（厄介な。だが、攻める隙は在る。あの剣は大き過ぎる。懐に入り込みさえすれば・・・）

「ああ、言い忘れていたが、ケーニツヒは・・・伸縮自在だ」

「ブーン！」

《なッ！？》

フリートがケーニツヒを軽く振り抜くと共に伸びた刀身に、ランサーだけではなくライダー達も目を見開いた。

しかし、ランサーは素早く伸びたケーニツヒの刃を深く腰を沈める事で避け、その背後でセイバーに鉄柱を振り下ろそうとしていた。バーサーカーの身体をケーニツヒの刃が深々と鉄柱ごと切り裂く。

「ブザンッ！」

「！？」

《なッ！？》

ケーニツヒに切り裂かれたバーサーカーは悲鳴を上げながら、崩

れ落ちた。

その姿にバーサーカーと戦っていたセイバーだけではなく、全員がバーサーカーを切り裂いたフリートに目を向ける。

「フウ……これでバーサーカーは戦闘不能だな」

そのフリートの言葉を肯定するように、バーサーカーは切り裂かれた場所を押さえながらその身を霧散させるように霊体化して、その場から消えた。

それを確認したフリートは、再び辺りに目を向ける。

「さて、これで援護すべき相手は消えたぞ？まだ、続けるか？」

《クツ！……ランサー、撤退するぞ。今宵は此処までだ》

そのケイネスの言葉に、ランサーは安堵の吐息を吐きながら槍の切っ先を下げる。

「感謝する。キャスター」

「私に感謝するのは止めておけ。貴様のマスターを潰す相手だからな」

ランサーはその言葉に僅かに眉を険しくするが、すぐに視線を逸らし、セイバーに視線を向ける。

二人の間には言葉は不要だった。今日の戦いの決着はいずれつけると、理解しているのだ。

そしてランサーも霊体化して、その姿を消失させた。

セイバーはそれを確認すると、戦いを傍観していたライダーに目を向ける。

「・・・結局、お前は何をしに出て来たのだ？征服王」

「さてな。そう言うことはあまり深く考えんのだ」

「じゃすともーめんとぷりーず!？」

ライダーの言葉に叫んだのは、彼のマスターであるウェイバーだった。

「じゃ何か!？お前は色々と言っていたけど！本当は何も考えてなくて！セイバーとランサーの戦いに介入して、他のサーヴァントを呼んだのか!？」

「まあ、そう言うことだなあ」

「ーバタツ

余りの事実にはウェイバーは意識が遠退き、倒れ伏した。

流石にアイリスフィールも今度ばかりはウェイバーに同情せざるえなかった。

一歩間違えば、この場を集った全てのサーヴァントを敵に回すような行動が、その場の勢いだったなどと、知りたくはなかっただろう。

しかし、ウェイバーを気絶させた張本人であるライダーはセイバーに目を向ける。

「セイバーよ。まずはランサーとの因縁を精算しておけ。その上で貴様かランサーか、勝ち昇ってきた方と相手をしてやる。さらばだ」

ライダーはセイバーにそう告げると、二頭の神牛に鞭を入れ、稲妻を散らしながら去っていた。

フリートはそれを確認すると、自身の肩に戻って来た竜を乗せて、セイバーに背を向けて去ろうとする。だが、その前にセイバーがフリートに質問してくる。

「待てキャスター」

「何か用か、セイバー？」

「……………貴様、何故バーサーカーを見逃した？」

「何のこ……」

「惚けるな。私に集中し、更にランサーの槍同様に魔力を打ち消す剣を持った貴様ならば、バーサーカーに重傷で終わらせたことは不自然だ。私を助けたことと言い……………何を企んでいる？」

「……………何れ分かる」

意味深な言葉を笑みと共にフリートはセイバーに告げると、その身を竜と共に霊体化させてセイバーの視界から消え去った。

セイバーは言い知れない嫌な予感を感じる。今回の聖杯戦争でも警戒すべきなのは、征服王でも、あの黄金のアーチャーでも、得体の知れないバーサーカーでもなく、今自身の前から消え去ったフリートなのではないかと感じながら。

戦闘が在った港場から、僅かに離れた地点に存在するマンホール。

その鉄蓋が揺れ動き、マンホールの中から一人の男性が出て来る。その男性の状態は酷いと言ふ言葉では足りないほどに、悲惨だった。全身が血まみれで、いたるところで毛細血管が破裂し、重度の放射能被曝者と変わらなかつた。

誰が信じるだろうか。彼こそが戦いに乱入して来た得体の知れないバーサーカーのマスターであると。

もはや彼の身体は生物としての限界を超え、死滅しかかつていた。だが、それでも彼には聖杯戦争を降りると言う選択肢はない。

彼の望みを叶える為には、例え血肉の最後の一滴まで燃え尽きることになつても、聖杯戦争を勝ち残らなければいけないのだ。

「……待つて……いて……くれ……必ず……
……君を……」

男性はこの場には居ない誰かに向かつて呟くと、壁を支えにしなから立ち上がる。

今夜の戦いで、バーサーカーもかなりのダメージを負つた。

ひとまずは休息しようと、彼は歩き出し、暗がりから飛んで来た注射器が彼の首に突き刺さる。

「……トスッ！」

「……アッ？」

一瞬彼には自身の首に突き刺さる注射器が、何なのか分からなかつた。

そして彼の意識は遠退き、意識が完全に途切れる前に彼が最後に見たのは、白衣を着た蒼い髪の女性だった。

第四話 魔剣（後書き）

今回使用宝具。

名称：《魔導殺しの双剣》ケイニツヒ・リアクテッド

ランク：A

分類：対軍宝具

詳細：ありとあらゆる魔導を分断してしまふ魔導殺しの双剣。持つだけで、魔力を用いた攻撃は無効化してしまうだけでなく、フリートの改造によって、分断した魔力が大気中に漂っている魔力を刀身に吸収し、斬撃の威力を向上させる機能が追加されている。

また、ランサーの《破魔の紅薔薇》ケイ・ジャゲル同様に魔力によって創られた防具などは無効化してしまう。更に刀身は伸縮自在であり、剣から放たれる砲撃は《対魔力》のスキルでは無効化出来ない。

第五話 状況（前書き）

現在、本作における間桐雁夜に関するアンケートを実施しています。

1・雁夜魔改造計画ルート（ネタ武器使用）

2・《恐怖》ルート（魔導師化、使う魔法は同じ）

3・絶望ルート（雁夜には救いなく、桜だけが救われる）

以上の三つです。詳細は活動報告の方にあります。

尚、1にあつた時間制限とは、力が発揮出来る時間です。身体は万全になります。

現在のところの結果

1・十二票

2・五票

3・二票

尚、混合も加えた票です。

締め切りは短いですが、今日の二十一時までにとさせていただきます。

活動報告か感想にご連絡ください。

第五話 状況

聖杯戦争の開催されている間、中立地帯に指定されている場所が存在する。

その場所こそが、冬木市の郊外に位置し、小高い丘の上に立つ冬木教会だった。

そして中立地帯に指定されている理由は一つ。この教会には聖杯戦争の監督役が居るからだっただけ。

しかし、今その本来ならば公正な監督役が居ると思われている教会は、ただ一人のマスターを聖杯戦争に勝利させる場所になっていた。

それが理由で、未だサーヴァントが現存しているにも関わらず、中立地帯の中で安全を得ている人物がいた。

遠坂時臣の弟子であり、今回の聖杯戦争の監督役の実の息子でもあり、脱落したと思われる、アサシンのマスターである言峰綺礼は自身が得た情報を時臣に知らせていた。

「港での初戦の顛末は以上ですが……間違はなくキャスターのサーヴァントは」

《アサシンの生存を知っているのは、間違いないと言うことだな、綺礼》

「はい」

目の前にある寂れた蓄音機―遠坂家伝来の通信機―から響いた時臣の声に、綺礼は頷いた。

港場にフリートが現れた最初の時に、フリートは乗っていた竜の劫火でアサシンが潜んでいたデリッククレーンを破壊した。

あの場にアサシンが潜んでいたことを知らない者から見れば、フリートが自身の力を示す為に不用意に力を晒したように思えるが、時臣と綺礼にはアレは警告なのだと理解していた。

《”アサシンを使って、自身の情報を調べたりすれば、次は私達に撃つ”という警告だろう》

「恐らくは……追加で送り込んだアサシンの視界から見たキヤスターの戦闘の中で、天候を操っていたのを確認しました。その気になれば、此処に雷を落とす可能性も有り得ます」

《……フウ、此度のキヤスターを召喚したマスターはかなりの当たりを引いたな。天候操作を行い、更には幻想種の頂点である竜を従えているほどの者を召喚したのだから》

通信機の向こうにいる時臣は、僅かに苦々しい声を出した。

誰も生存していると思っていなかったアサシンの生存がバレたばかりか、時臣と綺礼が裏で繋がっていることもフリートは知っていると二人は確信している。かと言って、その件でフリートをどうこう出来る訳がない。

決められたルールを最初から破っているのは、時臣と綺礼であり、更に追求すれば聖堂教会まで遡る。

少なくともフリートに何かしらの行動を時臣か綺礼が行えば、即座にフリートは報復としてルール違反の件を他のマスターに暴露する可能性が高い。

《……キヤスターはしばらく放置だ。多少、此方の動きを牽制したのは、アーチャーを恐れていることだろうからな》

状況的にフリートの牽制は、無数の宝具を所持しているアーチャ

ーを恐れていたことだと時臣は考えた。

確かにアーチャーであるギルガメッシュが盛大に宝具をひけらかしたのは、時臣と綺礼にしてもまずかったが、逆にその行動が他のサーヴァントとマスターの警戒心を高めた利点がある。

潜在力が明らかでないアーチャーよりも、真名が明らかになっっている者からの方が対抗しやすい。故に時臣と綺礼は当初の予定通り、他のサーヴァント達が潰し合って数が減るまでは情報収集に専念することの方針を固めた。

《では、頼むぞ、綺礼》

「お任せ下さい、師よ」

綺礼の言葉に通信機の向こう側にいる時臣は、満足げな吐息を漏らすと通信を切った。

綺礼はそれを感じるが何の喜びも、師である時臣の為に頑張ろうと言う気持ちも湧いてこない。実際に彼が聖杯戦争に参加しているのも、時臣に師事しているのも彼自身の意思ではなかった。

偶然にも聖杯戦争に参加する為の資格である令呪が刻まれたことから、綺礼は時臣の弟子になり、そしてアサシンを召喚して聖杯戦争に参加している。全ては遠坂時臣を勝利させて、聖杯を時臣が手に入れる為に。

その為だけに綺礼は聖杯戦争に参加していた。だが、港場での少し前まで別の目的が綺礼には在った。

その目的とは、聖杯戦争に参加する参加者の中にいたある人物との対峙。

セイバーのマスターとして、時臣が候補に上げていた”衛宮切嗣”。

時臣に切嗣に関する資料を渡された時から、綺礼は切実に切嗣との対峙を望んでいた。

しかし、港場にセイバーと共に現れたのは望んでいた人物である切嗣ではなく、全くの別人。

その瞬間に綺礼が聖杯戦争に参加し続ける意義は、失われた。

結局今まで繰り返して来た退屈な任務だったと、三年間を総括し、綺礼は乾いた感慨に耽る。

だが、運命は綺礼の聖杯戦争の脱退を認めなかった。

「……恐れながら、綺礼様」

「……何だ？」

音もなく現れた髑髏の仮面と黒いローブの女アサシンに驚くこともなく、綺礼は質問した。

アサシンはその問いに答えるように、手に持っていた首がねじ切られている蝙蝠の死骸を綺礼に差し出す。

「教会の外で此方の蝙蝠を発見いたしました」

「使い魔か？」

「はい。結界の外ではありませんでしたが、明らかにこの教会を監視する意図で放たれたものかと」

（キャスターか？）

アサシンの推測に、一番可能性が高い犯人はアサシンの生存を唯一知っているフリートではないかと綺礼は考える。

しかし、その可能性はかなり低いと綺礼は即座に思い直す。港場で見せたフリートの実力ならば、いかに諜報能力が高いアサシンでも監視がバレないようにすることなど容易いはず。

では、フリート以外に誰が不可侵領域に指定されている教会を監視していたのかと、綺礼は手掛かりを探す為に蝙蝠の死骸をつまみ上げる。

そして綺礼は奇妙な物が蝙蝠の死骸に付いていることに気がついた。蝙蝠の死骸の腹には、バンドで縛り付けられたCCDピンホールカメラが付いていたのだ。

ますますこれはキャスターであるフリートの仕業でないと綺礼は確信した。

魔術師と言う人種は世間一般のテクノロジーを軽蔑し忌避する傾向がある。港場でのフリートの実力から推察して、フリートは神代時代の英霊だと時臣と綺礼は考えている。更にキャスターであるフリートが召喚されてからの日数を考えれば、現代のテクノロジーなど扱える技術の修得している時間などない。

実際のところは現代どころか、魔法の領域のテクノロジーを平然とフリートは扱えるのだが、フリート自身、自身の素性は神代時代の英霊と思わせるように港場で動いたので、時臣と綺礼は完全に勘違いをしていた。

しかし、この場では綺礼に取ってそれは幸運に繋がった。

綺礼にはフリートの他に、教会を怪しんで使い魔に電子機器を装備させるような人物に心当たりがある。

そしてもし蝙蝠の使い魔を放った人物が、自身が思い描いている人物だとしたら確かめなければいけない。

数分後、綺礼は誰にも気がつかれないようにして、教会から夜の闇へと消えて行った。

冬木ハイアットホテル。

市内において地上三十二階の高さを誇る、今現在では木市の最高級のホテル。最高級の設備とサービスを誇り、利用者が納得するだ

け品質と格式を持っていた。

そのホテルの最上階である三十二階のスイートルームを借り切つて拠点としている聖杯戦争の参加者であるマスターがいた。

ランサーのマスターであるケイネス・アーチボルトである。

しかし、最高級のスイートルームを借り切つていながらも、彼は非常に苛立っていた。最も彼は借り切つているホテルのスイートルームが気に入らないこともあるが、今苛立っているのは今日の初戦の顛末である。

ケイネス自身は今日の初戦は万全を期して臨んだ。しかし、その成果は、期待していたものとは程遠いどころか、最悪以外の何ものでもなかった。

幼少の頃からケイネスは他の子供達よりも抜きん出ていた。どんな課題も、ケイネス以上の結果を出した者はいなく、ケイネスと競い合つて勝ちを取れるようなライバルも存在しなかった。

結果彼は天才と呼ばれる人種に、自他共に認められていた。

その結果、ケイネスは世界は自分を中心に進んでいると認識していた。魔術師協会の総本山である時計塔において”ロード・エルメロイ”とまで呼ばれ、数々の華々しい研究成果をケイネスは作り上げた。

過去において様々な結果を作り上げたケイネスは、未来でも自身の成功は約束されていると、本気で思っている。

そんな彼に取つて自身の目論見が外れると言う事態は、許し難いどころか、神の秩序を辱める冒瀆でしかない。

具体的に言えば、確実に仕留められたセイバーを取り逃がし、自身のプライドを平然とボコボコにしたフリートを討ち取れなかったなどと言う事態は、ケイネスに取つて言語道断だった。

「出てこい、ランサー」

「は。お側に」

ケイネスの呼び出しに打てば響く速さで、美貌の英霊であるランサーはケイネスの膝下に恭しく屈した姿勢で実体化した。

本来ならば実体化などしなくても、サーヴァントとは、マスターで在れば会話出来る。

とりわけ時計塔とはおいて、降霊科の主任講師でもあるケイネスならば、なおのこと応答は可能なのだが、ケイネスはランサーとは表情の機敏を余さず観察して対話したいのだ。

しかし、それは友好を結ぶためなどでは決してない。寧ろ逆。”信用出来ないランサーの真意を見極めるため”。その為にランサーをケイネスは実体化させて対話させているのだ。

更に今回は内容が尋問に近いからこそ、尚更に対面しての対話だった。

「今夜はご苦労だった。誉れ高きディルムッド・オディナの双槍、存分に見せてもらった」

「恐縮であります。我が主よ」

ランサーはケイネスの賛辞に驕ることも、露骨に喜悦することもなく淡々と礼を返した。

その様子には不平不満を胸に秘めていることもない。控えめで慎重み深い、武人の鏡にしかランサーは見えない。

しかし、ケイネスにはランサーの姿は決して真意を見せない不埒な姿にしか映らなかった。

「ああ、存分に見せてもらった上で問うがな……貴様、いったいどういっ了見だ？」

「……と、申されますと？」

詰問の色を帯び始めたケイネスの声音にも、ランサーは慎み保ちながら答えた。

「ランサー、貴様はサーヴァントとして私に誓ったな？この私に聖杯をもたらずべく全力を尽くすと」

「はい、相違ありません」

「ならばなぜ遊びに興じた？」

「……騎士の誇りに懸けて、戯れ事でこの槍を執ることはありませぬ」

自身の戦いを侮辱されながら、ランサーは怒りや狼狽もせず淡淡と答えた。

しかし、ケイネスは小馬鹿にしたように鼻を鳴らしながら、追い打ちをかけるように話かける。

「ならば、問うが、何故セイバーを仕留められなかった？一度ならず二度までもセイバーを圧倒しながら、更に私に令呪をひとつ使用させながらも」

「……それは」

「それだけでない！！何よりも、この私を侮辱した最弱のサーヴァントであるキャスターを討ち取れなかったどころか、手傷ひとつ負わせられなかったのはどういうことだ！？」

先ほどまでの冷静な様子など捨てて、ケイネスはランサーに向か

って怒声を放った。

しかし、フリートに関して別としても、セイバーに関しては初戦でありながらもランサーは充分過ぎるほどの健闘だった。

セイバーの左手に回復不可能な傷を負わせて、戦力の低下を及ぼしただけではなく、切り札である宝具を使用不可能に追い込んだ。ライダーの介入がなければ、あのままセイバーが敗れていた可能性は充分にある。

だが、ケイネスには確たる結果が出せなかった時点で腹立ったしくて仕方なかった。

ケイネスは自身の意にそぐわない結果がもたらされた時の感情を、持て余してしまう欠点がある。失敗や挫折とは無縁の人生を歩んで来た者によくある事だが、それゆえにケイネスは自身に対してではなく、ランサーに対して怒りを持っていた。

「……申し訳ありません。主よ……いずれ必ずや、あのセイバーとキャスターの首級しゝはお約束いたします。どうか、今しばらくのご猶予を」

「改めて誓うまでもない！それは当然の成果であろう！貴様は私と契約した！このケイネス・エルメロイに聖杯をもたらすと！それは即ち、残る六人のサーヴァント全てを斬り伏せることと同義だ！それを今更……セイバーばかりか、最弱のキャスター風情に必勝を誓うだと？いったい何を履き違えている！？」

「……履き違えているのは貴方ではなくて？ロード・エルメロイ」

怒声を上げているケイネスとは違つ、冷やかな第三者の声が奥の寝室の方から響いた。

その声にランサーとケイネスが顔を向けてみると、燃えるような

赤毛とは裏腹に、鈴烈な氷を思わせるような美女が腕を組みながら、ケイネスに非難の眼差しを向けていた。

彼女の名前はソラウ・ヌアザレ・ソフィアリ。降霊科の長の学部長の息女であり、ケイネスの一応婚約者である。

最も彼女がケイネスに向けている眼差しは、どう考えても未来の夫に向ける眼差しではなかった。

「ランサーは良くやったわ。間違いは、キャスターのサーヴァントが言っていたように、貴方の状況判断ではなくて？」

「ソラウ、何を言うんだ？」

「キャスターが言っていたように、バーサーカーの宝具は危険過ぎるわ。その点、セイバーはランサーが宝具の使用を出来なくしていた。ランサーの提言通り、セイバーと共闘して、キャスターが言っていたように今後の流れを私達に有利にすべきだったのよ」

港場での戦いには、ソラウはその場にはいなかったが、その顛末は彼女自身の使い魔を通じて逐一把握していた。

むろん面白半分で戦い観戦していた訳ではない。ソラウ自身には魔術刻印は宿っていないが、聖杯戦争に関する知識は充分に持っている。

その彼女から見ても、ケイネスのマスターとしての立ち振る舞いは不満だらけだった。

「貴方は令呪がどれだけ重要な物なのも忘れているの？初戦だと言うのに、不用意に使っただけじゃなくて、敵であるバーサーカーを護ることに使うなんて」

「……君はセイバーの脅威を知らない。私にはマスターの透視

力であるセイバーの能力が把握出来ていた。あれはとりわけ強力なサーヴァントだ。総合力ではディルムツドを凌いで余り……」

「そのセイバーに回復不可能な傷を負わせて、宝具の使用を封じたのが誰か忘れているの？」

「グッ！」

断固として告げるケイネスの反論を、ソラウは冷ややかに封殺し、ケイネスは声を詰まらせた。

「それにね……貴方まだ、あのキャスターを最弱なんて言っているの？ 竜なんて幻想種の頂点にいる最強種を従えているばかりか、天候操作なんて魔法の領域の魔術は簡単に扱って、更にはランサーと互角の接近戦までこなす。これだけの實力を持っているサーヴァントの何処が最弱なのか説明して欲しいわね」

「ウウ……」

ソラウの質問にケイネスは呻くしかなかった。

天候操作などケイネスでも不可能な大魔術。更に竜種まで加えれば、フリートを最弱のサーヴァントなどと呼べる筈がない。

確かにケイネスは時計塔において神童と謳われるほどの逸材である。

現に今回の聖杯戦争において、ケイネスは《始まりの御三家》が敷いた戦いのルールを根底から覆す荒技を遂げている。

サーヴァントとマスターの間にある因果線を、二つに分割して、魔力供給のパスと令呪による束縛のパスを二つに分け、別々の召喚者に分けると言う荒技を成功させていた。

魔力供給のパスはソラウが。令呪のパスはケイネスが。

これがどれだけの荒技なのか、魔術を知る者からすれば驚愕に値するだろう。言うなれば、既に完成しているシステムの機能を損なわず、自身が有利になれるシステムを後から追加したに等しい。

この点だけを見ても、ケイネスが優秀な魔術師であることは認められる。

「確かに貴方は神童と謳われるだけはあるわ……. だけど、魔術師としては一流でも、戦士としてはキャスターの言う通り三流よ。一体誰のせいでキャスターがランサーと互角に戦えたと思っているのかしら？」

「わ、私のせいだと？」

「当然でしょう。貴方ランサーにキャスターと戦うように命じる前に、自分が何を使ってランサーにバーサーカーの援護を命じたか、忘れていないの!？」

「……. アツ」

ソラウの指摘にケイネスは漸く港場での、最大のミスを理解した。ケイネスはランサーにバーサーカーの援護して、セイバーを倒させる指示を”令呪”を使って出した。しかし、そのすぐ後にフリートを討ち取れとランサーに命じた。

令呪を使っていない指示と、令呪を使った指示。どちらが優勢されるかなど明らかだ。

だが、ランサーはケイネスの指示通りにフリートと戦っていた。恐らくはセイバーを倒す障害になると、ランサーは令呪を誤魔化していたのだろうが、その程度の事で令呪が誤魔化しきれぬならば、ランサーは自身の意思に反してセイバーに攻撃などしなかつただろう。

つまり、令呪のせいでランサーはフリートに対して十全に実力を発揮出来ていなかったのだ。もし発揮出来ていれば、早急にフリートはケーニツヒを使用していただろう。そうしなければ手傷を確実に負っていた。

ケイネスが使用した令呪は、バーサーカーを守っただけではなく、フリートまでも守ってしまったのだ。

（キャスター！！必ず！必ず殺してやる！この私に、ケイネス・エルメロイを侮辱し、敵に回したことを後悔させてやる！）

この瞬間、フリートはケイネスに取って不倶戴天の敵になった。自身のプライドをとことんまでにコケにしていたフリートに、怨みの念を募らせる。

だが、もしも生前のフリートを知る者がいれば、ケイネスは自殺志願者にしか映らなかつただろう。港場でのフリートの言葉は、軽いジャブでしかない。本来のフリートがケイネスと対峙したら、それこそ死んだ方がマシと宣言する未来しかない。

そんな事を知らないケイネスがフリートに対して怨みを募らせていると、突然に防災ベルの騒音が鳴り出す。

「……ジリリイイイイ！！」

「何？何事？」

突然の防災ベルにソラウは当惑の眩きを漏らし、ランサーとケイネスは辺りを注意深く見ます。

同時に部屋に備わっていた電話のベルが鳴り出し、ケイネスは受話器を取って係員からの連絡を聞く。

「……わかつた……下の階で火事だそうだ。すぐに避難しろと

言ってきた」

受話器を元在った位置に戻しながら、ケイネスはソラウに状況を説明する。

「小火程度だか、どうやら火元は何力所に分散しているらしい。まあ間違いなく放火だな」

「放火ですって？よりもよって今夜？」

「フン、偶然なわけがあるまいさ」

不敵にケイネスは笑いながら、全身が歡喜に震える。

今、ケイネスが欲しかったのは自身が味わった屈辱を拭いきれるだけの行動と結果。それを行える場が向こうからやって来たのだ。

「人払いの計らいだよ。敵とて魔術師。有象無象どもがひしめく建物で勝負を仕掛ける気にもならんだろうからな」

「じゃあ・・・襲撃？」

「おそらくは。先の倉庫街で暴れたりない輩が、押し掛けてきたのだろう。面白い。不本意だったのはこちらも同じだ。そうだろう、ランサー？」

「はい。確かに」

ケイネスの質問にランサーは戦意を高めながら頷いた。

今の状況でこうも事を急いで襲撃をかけて来る組で考えられるとすれば、ランサーの《必滅の黄薔薇》ゲイ・ボウで負傷を負ったセイバーが一

番可能性が高い。宝具と言う最大の切り札が使用出来ない状況は不味すぎる。

港場での決着がつけられるかもしれない期待をランサーは感じ、ケイネスは指示を出す。

「ランサー、下の階に降りて迎え撃て。ただし無下に追い払ったりするなよ」

「承知しました。襲撃者の退路を断ち、この階に追い込めば宜しいのですかね？」

「そうだ。お客人にはケイネス・エルメロイの魔術工房を堪能してもらおうではないか」

何も考えずに、金額にものを言わせてフロアひとつを借り切った訳ではない。

ケイネスは自身が泊まっている場所を活動拠点として、徹底的に改装する為にフロアを借り切ったのだ。

その結果、ケイネス達がいる三十二階には二十四層の魔術城壁と呼べる結界が敷かれ、猟犬代わりに召喚した悪霊や魍魎が数十体。トラップにも抜かりはなく、廊下の一部に異界化させている空間も存在している。

「他の宿泊者どもが引き払えば、もう何の遠慮もいらぬ。お互いに秘術を尽くしての競い合いが出来るというものだ」

自身の工房に絶対の自信を持ってケイネスはソラウに話し、ゆっくりとソファアに座って敵が来るのを待つ。

己がいる場所が、最も狙いやすく崩し易い場所だとも気がつかず

屋外駐車場。

その場所には就寝中に火災警報で叩き起こされた宿泊客が居並んでいた。

その人々の間をホテルの従業員達が慌ただしく動き周り、避難状況を確認している。

「アーチボルト様！ケイネス・アーチボルト！いらっしやいませんか！？」

確認が取れていない最後の一組を従業員達は探し求めていた。

何せ最上階のスイートルームをフロアごと借り切った大金持ち。

最もトラブルにあつて欲しくない人物。

故に確認が取れないことを焦り、大声でフロント係の従業員が叫ぶ。

「アーチボルト様！いらっしやいませんか！？」

「……………はい、私です。ご心配なく」

背後から落ち着いた返答が響き、従業員は内心で安堵しながら振り返るが、すぐにそれは当惑に変わった。

従業員の背後にいたのはくたびれたコートを着た、冴えない日本人男性。

一度フロントで見た姿とは違う人物に、苛立ち相手を問いただそうするが、何も言葉が出なかった。

男性「切嗣」はそれを確認すると、静かに言い含めるように告げる。

「ケイネス・アーチボルトは私です。妻のソラウともども避難しました」

「……そうですか。ああ、はい。そうでしたか」

従業員は安堵の息を吐きながら、名簿にチェックを入れてその場から離れていく。

切嗣はそれを確認すると、人混みから離れて、一区間ほど離れた物陰に身を隠し、ポケットから携帯電話を取り出し、監視ポジションにいる舞弥に連絡を取る。

「準備完了だ。そちらは？」

《異常なしです。いつでもどうぞ》

冬木ハイアットホテルの斜向かいにある、建設中のビルの上階に隠れている舞弥は問題がないことを簡潔に伝えた。

その報告に切嗣は残るもう一つの携帯電話を取り出し、素早く一連の番号を入力する。

異変は即座に起きた。三十二階の高さを誇る冬木ハイアットホテルから不気味な音が断末魔の悲鳴を鳴り響き、ホテルは直立したまま崩落を開始する。

爆破解体という高等な解体技術が存在している。周囲には出来るだけ影響を及ぼさずに、最小限の爆薬で効率よくビルを瓦礫の山へと変えてしまう技術。

切嗣が今行ったのは正にそれだった。

事前の下調べで、魔術師が根城にしそうな場所を調べ上げ、たった今、爆破解体をケイネス達が根城にしていた冬木ハイアットホテルに実行したのである。

ビルの崩落の影響で発生した粉塵を恐れて、避難していた人々は逃げ惑うが、それを引き起こした張本人である切嗣は静か煙草に火を点けて、舞弥に連絡を取る。

「舞弥、そつちは？」

《最後まで三十二階には動きはありませんでした。標的はビルの外に脱出していません》

「・・・百五十メートルの高さから自由落下しては、幾ら魔術結界を張り巡らしていても無意味だ」

状況から考えてケイネス達の生存は絶望的だと、切嗣は思う。

本来ならば死亡の確認をしたいところだが、流石にこれだけの騒ぎでは確認は不可能だと思い、舞弥に撤退の指示を告げようと、携帯電話に手を伸ばし、その動きは止まった。

切嗣の視界の先には怯えて泣きじゃくる子供を抱えた母親がいた。一瞬だけその親子の姿に、切嗣は自身の妻であるアイリスフィールと娘のイリヤが重なって見えたのだ。

(感傷だ・・・こんな事では駄目だ)

自身の胸の内に湧き上がった感情を、切嗣は気の迷いだと断じる。昔の自身ならば、もっと冷徹に、それこそ誰一人避難などさせずにビルを崩落させていたと思いつながら、一刻も早く昔の冷酷さと判断力を取り戻そうと切嗣は誓う。

しかし、この時にホテルにいた人々を切嗣が避難させたのは正解だった。もし人々を避難させずにホテルを崩落させていたら、その瞬間に、切嗣は潜んでいる《小バツター号機》によって、肉片一つ残さずに死んでいたのだから。

自身が甘さだと断じた感傷に命を救われたとも知らずに、切嗣は今度こそ舞弥に撤退の指示を出す為に携帯電話を耳に当てる。

「舞弥。撤退する・・・」

「――キーン！」

「ッ！舞弥！！どうした？答える！？」

携帯電話の向こう側から届いた刃の響きに、切嗣は舞弥を呼ぶが、答えは返って来なかった。

「建物もろとも爆破するとは、魔術師とは到底思えない手段だな」

自身が居るビルの外の光景を眺めながら、言峰綺礼は柱の影に隠れている舞弥に声を掛けた。

教会を抜け出した後、綺礼は自身の求めている人物が現れるとしたら、ケイネスの下しか考えられないと思い、こうして網を張っていた。

そしてここぞと定めた場所に現れたのは、目的の人物で在った衛宮切嗣ではなかったが、さして問題はなかった。

どちらにしても、切嗣に至る鍵になる人物には変わらないのだから。

「言峰、綺礼」

「ほう？君とは初対面なはずだが。それとも私を知るだけの理由が在ったか？それに先ほど見せた身のこなし。君の素性は予想どおり

のようだな」

聞こえて来る綺礼の呟きに、舞弥は内心で自身の迂闊さに舌打ちする。

この場所に何故周到に姿を隠していたはずの綺礼が現れたのかは、舞弥には分からない。

だが、一つだけハッキリしていることがある。綺礼は衛宮切嗣を知っている。

「私ばかりに喋らせるな、女。返答は一つだけでいい。お前の代わりに此処に来るはずだった男はどこにいる？」

ーードン！ドン！ドン！

綺礼が放った問いに返ってきたのは、銃弾の三連射だった。

しかし、三発の銃弾は綺礼には当たらずに堅いコンクリートに当たった。綺礼は舞弥が銃口を向けた瞬間、銃口から発射される弾丸の弾道を予測し、先んじて身体を動かしたのだ。

常人に為せる業ではないが、綺礼は構わずに両手に握っている刃渡り一メートルほどの長さで、柄が極端に短い『黒鍵』と呼ばれる投擲武器を構える。

殺すつもりはない。生かしたまま捕らえて、切嗣に関する情報を吐かせる。

再び銃を向けてくれば、先ずは銃を弾き、次で機動力を奪う。

冷酷に舞弥を無力化させる手を考えながら、綺礼が足を踏み出すとした瞬間、綺礼の視界を白い闇が覆い尽くす。

ーーボフツ！！

「煙幕だと！？」

全く予期していなかった奇襲に、綺礼は一瞬怯む。

その隙を舞弥は逃さずに、脱兎の如く掛け去り、コンクリートを走る音が反響する。

綺礼は舞弥が逃げ出したことを悟るが、迂闊には動けなかった。先ほどの煙幕は舞弥ではなく、第三者が放った物。深追いすれば、自身も危ないと経験から悟っていた。

そして煙幕が晴れるのを待ち、ゆっくりと床に落ちていた発煙筒を拾い上げる。

「……フロアには私とあの女以外の気配はなかった。となれば、まさか地上から投げたのか？」

自身の邪魔をした発煙筒を握りながら、ゆっくりフロアの縁まで綺礼は移動し、強風に僧衣を煽られながら眼下に瞬く街を見下ろす。

「……まあ、いい。今日のところは標的の存在が確認出来た。待っている、衛宮切嗣」

そう綺礼は呟くと共に持っていた発煙筒を投げ捨て、その場から去って行った。

「ああ、やっぱり真つ先に落ちましたね。ランサーのマスターのアジト」

自身の本拠地で冬木ハイアットホテルでの出来事を一部始終、サーチャーから送られて来る映像で見っていたフリートは、呆れたように呟いていた。

そもそも、冬木市の街中にある建造物に隠れ家を作ること事態、かなり危険なのだ。ただでさえ、冬木には長年住んでいる遠坂と間桐と言う土地勘を持った敵がいる。それなのにケイネスは目立つだけではなく、その気になれば破壊し易いビルにアジトを作った。

フリートからすれば、一体何をどう考えてホテルに何かアジトを作ったのか全く理解出来なかった。

「ケイネス・アーチボルト……遠坂の家に放置されていた資料だと、優秀な魔術師らしいですけど……戦闘の素人なんて送った時計塔とか言う場所も何を考えているんでしょうね？」

フリートはそう呟きながら、《旅の鏡》で遠坂邸や冬木教会から盗み出した参加者に関する資料を読んでいく。

冬木市の陣地化が終わった後にフリートが実行していたのは、聖杯戦争に関する過去の資料と参加者に関する情報収集だった。

何せフリートの召喚者だった龍之介は、魔術回路を持っていただけの、魔術師でもないただの一般人。当然ながら、他の参加者達のように事前準備など全くない。

だから、フリートは陣地化が終わり次第に遠坂邸内部にあった聖杯戦争に関する資料と教会に保管されていた資料を全て、サーチャーをマーカーにして空間を繋げる《旅の鏡》を使用し盗み出した。

両方から盗み出すチャンスは在った。召喚されて三日もせず遠坂邸で起きたアーチャーによるアサシンの虐殺劇。

あの時に他に遠坂邸を監視していた者達は、アサシンの消滅に気を取られて気がつかなかったが、フリートは気がついた。

”アーチャーの宝具の乱射によって発生した魔力の影響で、遠坂邸に張られている探查結界がほんの数秒だけ機能が停止していたことに”。

確かアーチャーの力は強力。だが、その強力さがあの時には仇になった。内側から発生した膨大な魔力によって、一時的に探查結界

が機能停止した隙をフリートは逃さずに、超小型のマーカー機能も備えたサーチャーを遠坂邸内部に侵入させたのだ。

後はそれを起点にしてアーチャーがいない時や時臣が綺礼との連絡に集中している時を見計らって資料を《旅の鏡》で盗んでいた。

次の教会に関しては、綺礼やアサシンが教会に保護される前に資料を盗み出した。教会に関しては聖杯から送られて来た知識で知つてので、聖杯戦争に関する資料を手に入れるなら、此処しかない判断して資料を盗み出した。

因みに現在フリートが読んでいる資料は全てコピー。本物は既に遠坂邸と教会に戻してある。

「まあ、ランサーのマスターはどうでもいいとして……問題はこっちですね」

呟くと共にフリートは背後を振り返り、治療用カプセルに入っているバーサーカーのマスターを眺める。

当初フリートはバーサーカーのマスターを捕らえて、令呪を奪い取り、バーサーカーのマスターはそのまま魔力炉として使用するつもりだった。

港場見たバーサーカーの宝具と技量は、フリートから見ても素晴らしいかった。だからこそ、戦闘中にサーチャーが発見していたバーサーカーのマスターを捕らえに向かったのだが、バーサーカーのマスターの姿を目撃した瞬間、少しだけフリートは考えを変えた。

バーサーカーのマスターの状態は、余りにもフリートの目から見ても酷かった。一体何があそこまで酷い状態になっても、彼を動かすのか、興味が湧いたのだ。

手掛かりは彼を気絶させる前に聞いた誰かの名前。そしてフリートは彼のアジトである間桐邸内部を監視網で調べた。

そして見た。フリートが赦せないことを平然と行っている”蟲”どもの姿を。

怒りで世界破壊宝具を間桐邸にぶち込まなかったことは、奇跡だっただろう。激しい怒りは逆に冷静さと呼ぶ。

今のフリートは正にその状態だった。

「……この男から詳しい事情を聞き次第、”あの子”を”蟲”どもから助けだしますかね……取り敢えずは治療しますか。どういう結果になるにしても、身体がボロボロだと差し支えますからね」

そうフリートは結論を決めると、ゆつくりとバーサーカーのマスクである”間桐雁夜”の治療を、今夜中に終わらせる為に準備を開始するのだった。

第五話 動向（前書き）

アンケートにお応えくださった方々、ありがとうございました！

最終的な結果、1の《雁夜魔改造》ルートに決定しました。

今回の話で使用する予定のネタ武器が、大体解ると思います。
デジモンや型月関係ではありません。

第五話 動向

早朝、冬木教会。

言峰綺礼は魔導通信機の前に立ち、定時連絡を時臣と行っていた。

「先ほど冬木ハイアットホテルの跡地を監視していたアサシンから連絡がありました。ケイネス・アーチボルトの生存を確認。現在は、レスキュー隊の人間に暗示をかけて市内を移動中とのことです」

《流石は時計塔で神童とまで呼ばれている魔術師だ。あのような卑劣な手では敗れないと言うことか》

綺礼の報告に時臣はどこか満足げな答えを返した。

魔術至上主義の時臣に取って、昨晚起きた冬木ハイアットホテルの爆破は、許し難い手段だった。このような魔術師の誇りを侮辱するやり方を行う者には、制裁を加えなければいけないとさえ考えている。

《実行した犯人は、女だというのは間違いないのかね？綺礼》

「はい。アサシンが犯人を目撃していました。恐らくは単独犯でしょう。教会を監視していた者もその女に違いないでしょう」

綺礼はあえて自身が相対した舞弥の情報を時臣に隠さなかった。隠さなければ時臣がアサシンを使って搜索を命じることが、綺礼には分かっていた。それを利用して自身の目的の人物である衛宮切嗣をアサシンを使って大々的に搜索する。

どのみち、既にケイネスのアジトだった冬木ハイアットホテルの情報は、時臣に伝えている。ならば、今の状況を最大限に利用した

方が、自身の目的の遂行に一番近いと綺礼は判断していた。

これで別問題か何かが発生していたら、時臣に舞弥に関する情報を隠していたかもしれないが、問題がない今、自身の目的遂行を綺礼は優勢する。

《……綺礼。その女の搜索をアサシンに命じる。誰の命令で動いたのか。また、どの陣営なのかも調べ上げるように命じるのだ》
「ハッ。すぐにアサシンを動かします」

自身の師を利用していることに、綺礼は何の抵抗も感じることなく、時臣の命令に頷いた。

そして綺礼は通信を切り、地下室を後にして自身にあてがわれている私室に足を踏み入れ、一瞬戸惑いを感じた。

部屋は間違いなく綺礼にあてがわれてた部屋。しかし、部屋の空気が明らかに変質していたのだ。

その原因の主は部屋に置かれていたソファアーに寝そべりながら、ワインを優雅に飲んでいた。

綺礼はその意外としか言えない人物に、少なからず驚いた。

「アーチャー？」

我がもの顔でワインを飲んでいる、エナメルのジャケットにレザーパンツと言う明らかに現代風の服装に着ている黄金の髪に紅玉の如き双眸を持った人物―時臣のサーヴァントであるアーチャーの姿に綺礼は困惑を隠せなかった。

召喚されて以来、アーチャーが保有スキルである《単独行動》に物を言わせて好き勝手に物見遊山を繰り返し、最近では実体化して現代の装いを纏って夜の街を闊歩していることは時臣から聞いていたが、まさか自身の部屋にまで出向いて来るとは、綺礼は想像だに

していなかった。

「数こそは少ないが、時臣の酒蔵よりも逸品が揃っている。けしからん弟子もいたものだ」

「……一体、何の用だ？」

感情を押し殺しながら、綺礼はアーチャーに問う。

自身の集めた酒が無断で出されたばかりか、許しもなく勝手に飲まれているのだから、綺礼の反応は当然だろう。

しかし、アーチャーは全く悪びれたようすもなく、グラスを掲げて、意味深な視線を綺礼に投げ返す。

「退屈を持て余している者が、我の他にもいる様子だったのでな」

「退屈？」

「でなければ、時臣の意志に反して教会を飛び出すはずはなからう？」

「……何のことかな？」

アーチャーの問いに、内心の動揺を悟られないしながら綺礼は問いを返した。

どういう次第かは解らないが、目の前にいる英霊は、自身の昨夜の行動を知っている。

見られていたのかと、僅かに綺礼は警戒心を抱くがアーチャーはワインを飲みながら綺礼に視線を向ける。

「どうなのだ綺礼とやら？お前も、あの時臣めに奉仕するばかりで

心満たされているわけではないだろう」

「今更契約が不服になったのか？ギルガメッシュ」

「我を招いたのは時臣だし、この身の現界を保っているのも時臣の供物によるものだ。そして何よりも奴は臣下の礼を取っている。まあ、応えてやらんわけにもいくまい……だが正直、あそこまで退屈な男とは思わなんだ。全くもって面白味の欠片もない」

「……とてもサーヴァントのものとは思えん言い種なぐさだな？」

あまりの言い種なぐさに綺礼は呆れ果てながら、アーチャーが散らかしていたワインを片付けだす。

「そんなにも退屈か？時臣師の差配は」

「ああ全く退屈だ。万能な願望機を以てして《根源の渦》に至る、だと？つくづくつまらん企てが在ったものだな」

「《根源》への渴望は魔術師だけに固有のものだ。あれは、部外者がとやかく言えるものではない」

「まあ、確かに……我は我の支配の及ばぬ領域に興味はない……しかし、綺礼よ？ならば何故お前はこの争いに参加している？聞くところによれば、本来は貴様は魔術師とも対立する立場にある者。聖杯に何か望みがあるのか？」

「ッ！？……わ、私にも分からない」

「ほっ」

綺礼の答えにアーチャーは僅かに興味を持ったように、妖しく瞳を輝かせた。

その瞳に綺礼は一瞬自身の心の内を見抜かれたような不安を感じるが、それを押し隠してアーチャーを見つめ返す。

「私自身、何故聖杯に選ばれたのか解らない。成就すべき理想も、遂げるべき悲願もない私が、何故この戦いに選ばれたのか」

「理想もなく、悲願もない。ならば愉悦を望めばいいだけではないか」

「馬鹿な!」

我知らずに綺礼は声を荒げ、アーチャーを険しげに睨む。

「愉悦だと? そんな罪深い墮落に手を染めると言うのか?」

「罪深い? 墮落だと? これはまた飛躍だな、綺礼。何故愉悦と罪が結びつく?」

「それは……」

底意地の悪そうな笑みと共に返された質問に、綺礼は返答に詰まった。

彼自身、何故アーチャーの言葉に触発されて狼狽を露わにしまったのか、見当もついていない。

しかし、愉悦と言う言葉が明らかに自身の何かに触れたことだけは理解し、途方に暮れてしまう。

アーチャーはその綺礼の様子をからかうように見つめながら、し

たり顔で先を続ける。

「なるほど悪行で得た愉悦は罪かもしれない。だが人は善行によっても喜びを得る。悦そのものが悪であるなどと断じるのは、いったいどういう理屈だ？」

「………愉悦もまた、私の内にはない。求めているが見つかからない」

アーチャーの問いに綺礼が返せた答えは、それだけだった。

何時綺礼にある自信の裏打ちは感じられず、どことなく空虚さを感じさせる返答。

しかし、返答を聞いたアーチャーはおぞましくも禍々しい笑みで口元を歪める。

「言峰綺礼……俄然、貴様に興味が湧いてきた」

「………どういう意味だ？」

「言葉通りの意味だ。まあ聞け。愉悦と言つのはな、言つなれば魂の容だ。”有る”か”無い”かではなく、”識る”か”識れない”かを問うべきものだ」

「サーヴァント風情が、私に説法する気か？」

「粹がるなよ雑種。この世の贅と快樂とを貪り尽くした王の言葉だ。まあ黙って聞いておけ………ともかく綺礼、お前は、まずは娯楽と言つものを知るべきだ」

「娯楽だと？」

アーチャーの言葉に綺礼は眉を僅かに顰めるが、アーチャーは構わずに先を進める。

「そうだ。手始めに我の娯楽に付き合え。何時臣に課された役務の片手間に出来ることだ。他の連中の意図や戦力だけではなく、その動機も調べ上げよ」

「何故だ？」

アーチャーが告げた娯楽の内容に綺礼は質問した。

確かにアーチャーの告げた指示は、綺礼に与えられた任務からは逸脱しない。監視対象の周囲の者と交わす会話に終始耳を傾けるように、アサシンに指示を出し、後は綺礼が推察すればいいのだから。何故そのような事をするのかと、綺礼は純粹な疑問を以てアーチャーを見つめると、アーチャーはグラスをテーブルに置く。

「我はヒトの業を愛でる。条理をねじ曲げ、奇跡に縋ろうとする度し難い願望の持ち主が五人も雁首を揃えておるのだ。きつと中には面白味のある奴が一人か二人は混じっているさ。少なくとも、時臣に比べればいか程かマシであろうしな」

「……………いいだろうアーチャー。請け負った。しかし、時間には掛かる思え。未だに本拠地も解らぬサーヴァントもいるのだからな」

「構わぬ。気長に待つとする」

綺礼の言葉にアーチャーは頷くと、ソファから立ち上がり、部屋の方へ歩き出す。

部屋からでる直前にアーチャーは綺礼へと振り返る。

「今後も酒の面倒を見に来るぞ。この酒は、別段に天上の美酒とまでは言わんが、僧侶ごときの倉で腐らせておくには惜しいものばかりだからな」

最後までアーチャーは傲慢な言葉を告げるが、綺礼は肯定も否定もしなかった。

しかし、アーチャーはそれを許諾と受け取ったのか、満悦そうに笑いながら部屋を出て行く。

残された綺礼はアーチャーとの会話を思い出しながら、散らばっている残りのワインを片付けにかかった。

間桐雁夜は漆黒の夢の中にいた。

何も見えず、何も聞こえない。

漆黒の闇だけが支配する空間の圧迫的な圧力だけしか、雁夜には感じられなかった。

そして雁夜の前で漆黒の闇が唸り始め、闇の中から吼えるように、呪詛の音が響く。

” 我は――

疎まれし者――

嘲られし者――

蔑まれし者――”

闇の中から現れたのは、漆黒の甲冑と兜に身を包んだ騎士。

雁夜が現代に招いた狂戦士。バーサーカー。

バーサーカーは僅かに兜のソリットから確認出来る双眸を爛々と光らせ、呪詛の言葉を紡ぐ。

”我が名は賛歌に値せずー”

我が名は羨望に値せずー”

我は英霊の輝きが生んだ影ー”

眩き伝説の陰に生じた闇ー”

バーサーカーは地の底から這い上がる亡者のように、怨々と嘆きの声を雁夜に放つ。

あまりのおぞましさに、雁夜はバーサーカーから目を逸らそうとするが、バーサーカーは冷たい籠手を伸ばして雁夜の襟首を掴み上げる。

それによって痩せ衰えた雁夜の体軀はそのまま宙へと吊り上げられ、バーサーカーの狂気に渦巻いている眼光を直視する。

”故にー”

我は憎悪するー”

我は怨嗟するー”

闇に沈みし者の嘆きを糧にして、光り輝くあの者達を呪うー”

「ッー!!」

怨嗟の宣言と共に容赦なく喉を締め上げられた雁夜は、苦悶するが、フツと視界に白銀の鎧に身を包み、蒼いドレスを着た少女が写り込む。

その少女に雁夜は見覚えが在った。

港場でランサーと戦い、バーサーカーが暴走する切欠になった少女。アインツベルンの操るセイバーのサーヴァント。

”あの貴影こそ我が恥辱――

その誉れが不朽であるが故、我は永久に貶められる――”

――バン！！

言葉と共にバーサーカーが被っていた兜が割れた。

闇の中故に面貌は確認出来ないが、熾火のように燃える双眸の下で、ガチガチと餓え震える乱杭歯だけは、はっきりと見える。

”貴様は、贄だ――

貴様の生命を、貴様の血肉を――

我が憎しみを駆動させるために、寄越せ！！――”

バーサーカーは冷酷に宣言すると同時に、友無を言わずに雁夜の首に禍々しい牙を突き立てようとする。

雁夜は迫る牙に絶叫を上げようとするが、その直前にバーサーカーが支配していたはずの闇から幾重もの鎖が出現し、バーサーカーの四肢を拘束する。

――ガチイイイン！！

「！？」

四肢を突然に拘束されたバーサーカーは、戒めを解こう暴れ狂うが、バーサーカーを拘束している鎖はビクともしなかった。

突然の事態に雁夜は訳が分からずに、尻餅をつきながら目の前で暴れ狂うバーサーカーを呆然と見つめる。

その雁夜の背後からゆっくりと金属が床を踏み鳴らす音が響いて来る。

「ガシャ！カシャ！カシャ！」

「ハッ！？」

聞こえて来た足音に雁夜は背後を振り向くが、深い闇しか雁夜には見えなかった。

いや、一つだけ。闇の中で、はっきりとバーサーカーとは違う、強い意思が籠もった瞳が雁夜を見つめていた。

雁夜が呆然とその瞳を見つめていると、バーサーカーとは違う別の意思が宿った声が闇の中で響く。

” 悠久の時の果て、我は待っていた――”

資格ある者。目覚めし時、母に伝えよ――”

時は来た。我を纏い、我を駆る者――”

己が矛盾を悟り、されども立ち上がるならば、我は汝の牙となる――”

「・・・牙？・・・何を言ってる？」

” 汝はまだ、資格ある者ではない――”

矛盾を乗り越えよ。さすれば、我は汝の牙となる――”

その宣言と共に闇だけが支配していた空間に光が差し込み始める。目覚める時が来たのだと、漠然と雁夜は悟り、最後に自身に話しかけて来た者がいる方を見してみる。

そこにいたのは、闇よりも暗く、禍々しい漆黒の鎧で全身を覆い、背中に黒きマントを羽織り、黒い長剣を携えた、狼を模したような兜で頭部を全て覆い隠すように被った騎士だった。

目が覚めた時に最初に見たのは光だった。

先ほどまでの闇だけが支配していた夢とは違い、暖かな光が雁夜の身体を包んでいた。

自身が何故このような場所にいるのか、雁夜には全く分からず、意識を失う前のことを思い出そうとする。

（確か俺は・・・そうだ。港場で他のサーヴァント達の戦いを見ていて、その後に時臣のサーヴァントにバーサーカーを放った・・・それでバーサーカーは暴走して・・・俺はバーサーカーへの魔力供給で重傷を負った）

間桐雁夜は他のサーヴァントのマスター達とは違って、即製の魔術師だった。

とある理由で雁夜は一年と言う魔術師が育つには短すぎる時間の中で、己の全て犠牲にして魔術師になった。

しかし、その代償は重かった。

彼は聖杯戦争に参加するために間桐の魔術訓練を耐え抜いたが、その結果、雁夜の身体はボロボロと言う言葉では足りないほどに悲惨な状態になってしまった。

左半分の顔は死相じみた状態で硬直し、左目は壊死。肌は土気色で、頭髮は白髪に変わり、黒い罅が走っているように静脈が浮きでている。

更にはバーサーカーを維持しているだけで、身体の中で魔力を作り上げている刻印虫が暴れ、動悸や眩暈に苦しむ。その上、戦闘になれば絶え間なく刻印虫が暴れ続け、生きながらに貪り食われると言う激痛を味あわされる。

自身が今身体が残っていることが奇跡だと考えながら、雁夜は起き上がるうとするが、フツと違和感が感じる。

「視界が広い？」

右目しかまともに機能していないはずなのに、雁夜の視界は左側の方もはつきりと見える。

何故と疑問に思いながら、左手を動かしてみると、更に疑問が増える。

自身の左半身は過酷な魔術の訓練によって、一時期麻痺し、今でも感覚が鈍かったはず。しかし、今左手は何の苦もなく動いた。更に驚くことに土気色だったはずの肌の色は健康的な色に戻っていた。

「ど、どうということだ？一体どうなって!？」

「私が治したんですよ、バーサーカーのマスターさん」

「誰だ!？」

自身以外に部屋の中にはいないと思っていた雁夜は、慌てながら声の聞こえて来た方に目を向けた。

そこには両手を組みながら、部屋の入り口の扉に身体を預けているフリートがいた。

「お、お前はキャスター!？」

港場を監視している時に目撃した、自身のサーヴァントであるバーサーカー以外のサーヴァントの姿に雁夜は慌てて立ち上がる。

一体何故フリートが居るのは分からないが、聖杯を求めている敵同士の関係。バーサーカーを呼び出して戦わせようと、雁夜は右手を構えるが、フリートは両手を上げて戦闘の意志がないことを示す。

「ストップ。私には今のところ戦闘の意志はないですよ。それにバーサーカーを呼んでも来ませんからね」

「何？ど、どついうことだ？」

雁夜は困惑したようにフリートに質問し、フリートは両手を上げたまま自身の右側を視線で示す。

その動きに雁夜がフリートの右側に目を向けると同時にモニターが展開され、両手の籠手以外鎖らしき物で雁字搦めに拘束されているバーサーカーの姿が映し出される。

「バツ、バーサーカー！？」

「貴方の治療を行っている時に邪魔をしようとしたので、私が所有している鎖型の拘束宝具で動きを封じました。全く、幾ら理性が無くても自身のマスターの状態ぐらいは察して欲しいですね」

そうフリートはバーサーカーに対する愚痴をこぼすが、雁夜はそれどころではなかった。

即製魔術師の雁夜の最大戦力はバーサーカー。そのバーサーカーが使用不可能となれば、雁夜はサーヴァントに対抗する術がない。

どつしたら良いのかと、雁夜は混乱するが、フリートは構わずに雁夜に声を掛ける。

「まあ、落ち着いて下さい。少なくとも今は何もしませんよ。それよりも聞きたいことがあります」

「な、何だ！？何が聞きたい！？」

「聞きたいことは一つです。貴方の生家に居る少女は何時から虐待を受けているんですか？また、貴方はその虐待に関わっているのか？全部話して貰いますよ、間桐雁夜さん」

フリートはそう何時になく険しげな顔をしながら間桐雁夜に詰め寄るのだった。

間桐雁夜。フリート・アルハザード。

この二人の出会ったことによって、後に魔術協会及び魔術に関わる全ての者が恐れる存在。

《魔導喰いの黒炎騎士》が生まれるのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2904y/>

漆黒、恐怖、電子、特別編

2011年11月26日22時46分発行